魔法使いの真実と偽りの狭間

ソルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いの真実と偽りの狭間

【Ｎコード】
Ｎ８８３３Ｌ

【作者名】
ソルト

【あらすじ】
奇跡が起きた……
人間のＤＮＡの中に炎や水などの情報を組み入れることにより、物の媒体が無くとも出すことが出来るようになる技術が編み出されたその名もレイジシステム
その世界のレイジシステムを扱うもの達を集め、英才教育を施す『ファンタズム学園』に通うリアン・ハーベルとその仲間達の

真実を導き出す物語

現在凍結中だお

学園の日常（前書き）

初投稿です！！

アドバイスや誤字脱字など、後感想もお待ちしています。

それではどうぞ

学園の日常

ここはファンタズム学園、総勢三千人もの生徒達が年齢別に初等部、中等部、高等部に別れ、勉学に励んでいる。そしてとある高等部3年の教室。人数が4人という明らかに少ない教室の中、1人の男が退屈していた。

「まったくもってだるい」

本当にだるい、だるすぎる、何でこの世に数学なんてあるんですか？　社会に出た時役に立つんですか？　でももうすぐこの退屈な時間からやっと抜け出せる。

3・2・1……

授業の終わりを告げるベルが鳴り響く。

「それでは、今日はこれまで」

先生はそう言うともう用は無いのか、足早に教室から出ていった。

「終わったー！」

俺は生き返ったかのように大きく伸びをする。この後は昼休みなので飯のじかんだ。

「リアン、飯食おうぜ！」

と誰かが待ちに待ってましたと言わんばかりに話しかけてきた。

「何だ、レイかよ……ちっ！」

話し掛けて来た人物に舌打ちをかます。

「ちょっ、酷くね！？　飯に誘っただけなのに何その態度！」

こいつの名前はレイ・クロード。そこそこ整った顔立ちに、髪は茶髪のツンツンヘアー、運動神経抜群のスポーツマン野郎。小学校の頃から一緒にいる俺の親友であり、オモチャでもある。

「だいたい男に誘われて誰が喜ぶよ？　俺を誘うんだったら可愛い女の子を用意しろや」

だってねぇ？　やっぱり高校生で思春期真っ最中ですから。

「私達じゃ不満？」

「ご一緒してもよろしいですか？」
突然会話に入り込んで来た女の子２人。
「いえいえ、滅相もございません、貴女様方と食事の席をご一緒出来るとは至極光栄の極みでございます」
俺は手を胸に当て、大げさにお辞儀をしながら言った。
この２人は少し高慢な口調のフィリアと丁寧なユウナ。整った顔立ちに髪型はショートで色は赤、その色は例えるならルビーのように綺麗な色で荒々しい炎のようなイメージを彷彿させる。はっきり言って超絶な美人、このちょっと気の強い女の子がフィリア・クランベルだ。
だけどがさつなところがあり、乱暴、遠くから見れば憧れの的になるが、本当の性格を知るとそれはもう幻滅だ。
「何か失礼なこと思わなかった？」
「思ってないです！」
危なかった、勘まで鋭いぜ……。
んで、もう１人がユウナ・ハーティリー。こちらも整った顔立ちをしていて髪型は腰まで届くようなロングに色は青、例えるならサファイアのように澄んでいて、何もかもを洗い流すようなイメージを彷彿させる色をしている。品行方正で綺麗というよりは可愛い、フィリアとは真逆の俺の癒しだ。
「ふふっ、お二人を見ていると楽しくて好きです。主に可笑しい意味で」
とか言われたけどね。俺の癒しだから！　疑わないで！
「それじゃあ天気もいいことだし！　屋上で食おうぜ！」
「ナイスだレイ！　屋上に行こう今すぐ行こう、この空間から早く脱出するんだ」
そうして俺達は屋上に向かった。

ーー
ーーーー

ーーーーーー

天気に恵まれ、太陽の光りが差す中、屋上は喫茶店のように椅子とテーブルが置かれていて多くの生徒達で賑わっている。席が空いているか心配だ。

「あそこ空いてるぜ！」

そんな心配をよそに、レイが丁度４人用のテーブルを見つけたのでそこに座る。

「やっと飯だ～」

俺は自分の弁当箱を開ける、今日は三色ご飯におかずは卵焼き、唐揚げ、ミニロールキャベツというちょっとだけ贅沢な弁当だ。もちろん手作りである。

「いつ見ても見事な弁当よね……」

先程購買で買っていたメロンパンと俺の弁当を交互に見て、ため息混じりにかじりながらフィリアが言う。

「本当に凄いです。私なんかまだまだ……」

ユウナは自分のお弁当を見比べて落胆したようだ。卵焼きにアスパラのベーコン巻き、きんぴらごぼうにご飯には鮭がちりばめてあり、いたって家庭的でいいとは思うけどな。

「唐揚げくれ！」

レイは目をキラキラさせながら唐揚げを箸で差す。レイのは米一色の見事なお弁当だった。

最初からたかる気だなおい。

「親はどうしたんだよ、作ってくれなかったのか？」

さすがに白しかないお弁当には驚いた。

「あぁ、なんか忙しいらしくて帰れないって置き手紙があった。ったく、一体何してんだか、んで唐揚げくれ」

つまりはレイは作るのではなく、おかずは最初から貰う気でいたということか。

「まぁ大変そうだけど頑張れ。今度からはちゃんと作るか買って来

いよなーーっておいレイ！　俺の唐揚げ取るな！　許可した覚えはない！」
　レイの目が一瞬キランと光ると箸が消え、視認不可能なスピードで唐揚げを取っていった。
「俺はお前の答えを聞かなくてもわかる！　答えはイエスだろう？　てかそれ以外の答えは聞こえない仕様になっている！」
　レイの耳はご都合主義に改造されていたのであった。小さい頃からの友達だがそんな話しは聞いたことがない。
「おまっ、食うな！　全部はやめろ！　ガンズスタイル『風弾』（ウインド・バレット）」
　俺は出力最弱の『風弾』をレイの額に放った。「痛っ！　何すんだ、魔法は使うなよ！」
　レイは理由がわからないと言った表情でまくし立てる。逆切れっていうんだそれは。
「何すんだはこっちのセリフだ！　唐揚げが無くなったんだぞ！　俺の心の痛みはそんなもんじゃねぇ！」
　唐揚げは俺の楽しみだったのだ、あのカリカリとした食感、中の柔らかい肉とその肉汁を楽しみにしてたんだ。もちろん作るのにもそれなりの危険性がある。それらが全てレイの栄養となってしまったのだ。そりゃ怒る。
「はいストップ！　喧嘩は終わり、みんなに注目されてるよ？」
　辺りを見てみると皆がこっちを見てひそひそと何か話している。ちょっと恥ずかしくなり俺達は素早く座る。耳を澄ますとな～んだ。と残念そうな声が聞こえた。
「やっぱり楽しいですねこのメンバーは、リアンさんは風をいつも扱っていますが何型ですか？」
　ユウナが嬉しそうな表情をしながらこちらに聞いてくる。そういえば言ってなかったな。
「あぁ、知ってるとは思うが俺の階級はテトラマスターだ。取り込んでるのは風二つに炎一つ、水一つのバランス型だな」

階級とはＤＮＡの中に取り込んでいる魔法の数だ。ファーストマスター、セカンドマスター、サードマスター、そしてテトラマスターと続く、５つ以上取り込むとＤＮＡのバランスが崩壊し、体の形成を保てなくなるので実質上最高ランクだ。バランス型というのは魔法の種類をまんべんなく取っている人のことで他にも特化型、超特化型などがある。

「んで、レイがなんだっけ？　バカ４つのテトラだっけ？」

俺はレイに向かって聞いてみる。唐揚げの恨みが消えたわけではない。

「酷くね！？　そんな魔法なぇし、俺は地が４つの超特化型だから、しかもバカじゃない……なんで皆目を逸らすの？」

レイが心外だ！　と言わんばかりに高々と言う。しかし自分が頭が悪いことに気が付いていないとは、やはりバカに変わりはない。

「この流れは私も言ったほうがいいかな？　じゃあ、改めまして、私は炎３つに風１つの特化型だよ。」

はっと気付いたようにフィリアも流れに便乗して自己紹介をする。

「それでは私も、私は水３つに雷１つのフィリアさんと同じ特化です。」

ユウナもそれに習う。

「知ってたけど改めて考えると凄いよな、最高ランクが４人も揃ってると」

レイは俺から奪った唐揚げだけでなく、ユウナから貰ったおかずを食べながら神妙な顔をして言う。

「まぁそこには同感だ、さすが選ばれた子供達って呼ばれる事はあるな」

そう、この魔法が使える技術、レイジシステムは全員が全員使える訳じゃない。遺伝子の中に異物を入れるわけだから適正が必要なのだ。

さらにはその適正次第で使える魔法の数も、何を入れられるかも

決まる。故にテトラマスターは人数が極端に少ない。演算能力やイメージ力で威力の増減はあるが、階級を上げるのに努力など無意味、完全に才能の世界。それがレイジシステム。
　そしてこの学園、ファンタズム学園は魔法の才能のある子供達を集め、英才教育をするための学園、さらには階級毎にクラスが分かれているのでそれがリアン達が選ばれた子供達の理由である。
「おっ、そろそろ昼休みが終わるな、それじゃあ教室に……」
　その時、爆弾が爆発したような音が鳴り響いた。
「ん？」
　校庭のほうから何やら騒がしい音がする。
「行くぞ」
「行こうぜ」
「行こう」
「行きましょう」
「どうやら委員の仕事になりそうだな」
　そうリアンは呟き、ポケットから腕章を取出し、右腕にはめる。
　その腕章には風紀と書かれ、他の３人も付けていた。

風紀の仕事（前書き）

早めに投稿〜

それではどうぞ

風紀の仕事

「先に行く！　後から来てくれ！　フィストスタイル『風駆』（ふうく）」
俺は『風駆』を使い、加速する。
大事になる前に間に合えばいいが……
ーー
ーーーー
ーーーーーー
「なんだよこれ……」
校庭の地面にあちこちクレーターができ、植木はめちゃくちゃ、怪我人らしい人がいないのは不幸中の幸いだな。
奥を見てみると2人がレイジを行使していた。元凶はあの2人か……
「お待たせ、現状は？」
フィリアたちが息を切らせながら、少し遅れてやって来た。
「見てのとおりさ、元凶はあの2人だ、属性は見たところ風と火だな」
まったく、あの爆発音は風側のコントロールが下手なせいだな、酸素濃度が上がるから火の威力が上がって爆発が起こる……上手く使えれば武器にもなるのに、中途半端だから危険になる。
ぶっちゃけ止めるの面倒くさいんだけどね。
「私行こうか？」
フィリアがやる気満々な表情で言う。こいつちょっとあぶねぇ。
「いやっ、俺が1人で行く、風使いさん達を捕まえるついでに講習会でも開こうかね。それにセカンドブレインもつけていないから余裕だよ」
セカンドブレイン。

魔法使いが大技・同時に別の魔法を使う時の演算を肩代わりするもののことだ。
だから必然的に相手は大技を使えないし多方向からの攻撃もない……多分。
「じゃあ行ってくる」
まぁとりあえずは喧嘩から止めますか。被害がでたら大変だしね。
「フィストスタイル『風駆』」
ーー
ーーーー
ーーーーーー

まったくもって面倒くさい、子供じゃあるまいしなんで喧嘩なんてするのですかね〜。
「うらぁ、『ウインド・カッター』」

「しゃらくせぇ！　『ファイア・レイン』」
無数の刃に雨のように降り注ぐ炎の玉。
それを見た生徒達が息を飲むなか、俺は双方がぶつかる中心地点にたどり着いた。
「ふぅ〜、ギリギリ間に合った」
俺は両手を伸ばし、手を銃の形にする。
狙うは風の刃と炎の玉、撃ち損じは許されない。
「ガンズスタイル　『嵐弾』（ストーム・バレット）」
指の先から弾のようなものが高速で撃ち出され、無数の刃と雨のように降り注いでいた炎がとたんに消えてゆく。
その鮮やかさとスピードにみんなは何が起こっているかわからなかったが、その光景に唖然としていた。「お前らいい加減にしろよ！　周りの被害のことも考えろ、そして風使いの君！　刃の構成が甘くて相手に届く前に消えてたのがあるぞ、もっとイメージしろ、風の刃は鋭く、速くが理想だ。炎の君はなぜその魔法を使った？

おそらくは数には数をということで使ったと思うが、狙いがつけられなくて博打気味だぞ、自分に当たるものだけを消せばいいんだからもっと頭を使いなさい」
よく息継ぎなしで言い切った。偉いぞ俺。しかし危なかった……もうちょいで関係の無い生徒にまで危害が及ぶところだったな。
しかし俺の教えはやつらに届いたのかね？
大抵の場合は……
「うるせぇ！　引っ込んでろ！」
「邪魔すんじゃねえよ！　お前から燃やしてやろうか」
はいこのとおりです。頭に血が上ってそれどころじゃありませんね。
実力差どころか俺が誰かもわかってないし。
仕方ない、言ってもわからない子にはきつーいお仕置きをしなきゃね。
「はい？　申し訳ないのですが私は人語しかわからないので出来ればそちらで話していただけ……あぁ、すみません、喋れないからわけのわからない言葉を発しているのですね。先ほど基礎中の基礎を言ってあげたのですが君たちの脳ミソじゃ理解ができないのではなく、言葉が理解できなかったわけですか、バカ共め」
軽ーく挑発、この丁寧な口調がムカつくんだよね。
「「ぶち殺す！」」
すぐに2人は反応し、予想どおりに怒ってくれた。やっぱり単純バカ共だ……「潰れろ！　『ウインド・ハンマー』」
風使いが俺にレイジを放つ。さっきよりは構築力もいいな。こっちのほうが得意ってわけね。でもやっぱり甘い。
「灰になれ！　『フレイム・ボール』」
炎のほうはサイズがでかい、大きければいいってもんじゃないのに。まぁ、精神的なプレッシャーは与えられるけど。
別に使わなくても余裕だが、実力差をわからせるために使いますか。

「『風神の聖域』」
そう唱えるとリアンの周りに風が吹き始め、風を纏うような姿になる。
「まず風使いに対しての教えその1、風は全属性の中で一番扱いが難しい、理由は目に見えず、肌で感じるしか風を知る手段がないためイメージがしづらいから、レイジは自分のイメージと風の流れなどを計算する演算能力によって強さが変わる。つまり同じ属性使い同士で戦う場合、取り込んでいる個数にもよるが基本はイメージ力と演算能力が高いほうが勝つ」
リアンに向かって放たれた風のハンマーが当たる直前で霧散する。
「風使いに対しての教えその2、君の風のハンマーは脆い、至るところに綻びがあり、そこを突けばこのとおり霧散する、ハンマーを構成するならもっとハンマーのことを知れ、そうすれば自ずと綻びも減る、そして俺の『風神の聖域』は自動的に、的確に攻撃を防御する。」
俺は風使いに講義を行う。やっぱり勉強は重要だもんね。
「もらったぁ！　灰になれ」
その刹那、炎の玉がリアンに迫っていたがこれも直前で消えてしまう。
「炎使いに対しての教えその1、高レベルの風使いと戦う時は近距離で戦うこと、遠くからだと炎が燃えるために必要な酸素をカットされるから、そしてその2……フィストスタイル『風駆』」
驚愕して立ち止まっている炎使いの前に一瞬でリアンが現れる。
「バリエーションが少なすぎ！　フィストスタイル『風打掌・速』（ふうだしょう・そく）」
俺は炎使いに風で加速させた掌打を腹に入れる。
炎使いは五メートルほど吹き飛び、痙攣していた。……やりすぎた？
「フィストスタイルにガンズスタイル……お前まさか」
風使いが信じられないとでも言うような表情しながら尻餅をつく、

おっ！　やっと気付いてくれたか。
「学園の風紀委員長であり、人間離れした演算能力とマルチタスク能力を持ち、独自に開発した様々な状況に対応できるスタイルを使うという『風神』リアンか！？」
説明口調でありがとさん、いつ聞いても恥ずかしいよね『風神』って……
でもちょっと嬉しかったりして。
「後つけ加えるならセカンドブレインを持っていないってことかな。そういうことでリアン講座は終了～、授業料は生徒指導の人からの罰で～す」
これにて一件落着！　こいつはもう戦意ないし1人は気絶してるしね。
「お疲れ様です、リアン」
「お疲れー、リアン」

「リアンどうだったよ？　あいつらは？」

みんながそう言いながら駆けよってくる。
「ありがとう、あいつらの練度は低くかったな、構成も中途半端だったし、基礎も出来てなかったから一年生だろ」
っても、全国から才能のある子供を集めてる学園なだけあってランク的にサードはあったけどな。
「ご苦労様です。リアン君、処罰対象の人は？」
話し掛けてきたのはリーザ先生だ。
金髪を結い上げてちょっとつり目な眼鏡は堅苦しく、厳しいものを想像する。　実際そのとおりだが。
「あそこの2人です」
俺は炎使いと風使いの2人を指を差しながら言った。
これでやっとおわ……
「わかりました。それでは連れて行きますので風紀委員の方々は後

片付けをお願いします」
り？　マジで？　こんなクレーターだらけなところをたった４人で片付けろと？
「それじゃあよろしくお願いします」
そう言ってリーザ先生は２人を連れてどっか行った。
「「「「不幸だ！」」」」
こうして波乱の昼休みが終わった。

風紀の仕事（後書き）

初バトル……なのか？

一方的な展開になってしまったよ

アドバイスや誤字脱字などがありましたらご指摘下さい。
感想もお待ちしています

授業～魔法理論と魔法管理局員（前書き）

倍くらい書けた。

アドバイスや誤字脱字のご指摘、感想をお待ちしています。

それではどうぞ

授業～魔法理論と魔法管理局員

３－Ｓクラスの教室、ＳクラスのＳは魔法使いとしてのランク分けである。クラスは、Ｃ、Ｂ、Ａ、Ｓがあり、下からファースト、セカンド、サード、テトラの教室となっている。

そしてＳクラスの教室には生気の抜けた４人だけがいた。

「「「「疲れた～」」」」　俺ら４人は教室の机に突っ伏している。

理由はもちろん先ほどの喧嘩の後始末。

クレーターの修復に植木の植え直し、花壇に畑にその他にも色々あった。思い出しただけで疲れる。

そんな風にだらけながら過ごしているうちに授業開始のチャイムが鳴り響き、同時にダリス先生がやってくる。

「授業始めるぞ～」

この先生はダリス先生だ。３０代前半くらいで温和な性格をしているが、授業の時は質問地獄をしてくる。

「それじゃあ、今日は先週の魔法理論の復習から入る、リアン君、まずは体に取り込める属性の種類を答えなさい」

ほら早速きたよ、なんて嫌な先生だ。だらけてるのをわかっているくせにわざわざ俺から指すとは、真面目なユウナだっているだろうに、仕方ない。

「体に取り込める、つまりＤＮＡの中に取り込める属性は炎、水、雷、地、風の５つです」

まぁ余裕だから問題ないがな。

「よろしい、次は何故この５つが取り込めるかの理由を……レイ君」

そんな俺の答えに満足したのか、対象をレイに変えたようだ。

「……奇跡？」

レイは正解の可能性があると思っているのか、恐る恐る答える。

「ふぅ、そんなことじゃこの先大変ですよ。それではフィリアさん」

そんな答えに呆れたのか首を左右に振り、フィリアに質問をする。

「はーい、理由は科学の進化、炎などの情報を原子レベルにまで分解し、そして組み込むことによってレイジが使えるようになります」
フィリアは自信満々に答える。
「うーん、惜しいですね、確かに科学の進化も理由の１つですが、それではレイジを使える理由になっています。ユウナさん、お願いします」
それも違ったようで、最後に優等生なユウナに回す。
「わかりました。人間が炎、水、雷、地、風を取り込める理由は人類が最も慣れ親しんでいるものだからです。地と風は人類が生まれる時からあり、水は人体を構成するためのもの、雷、つまり電気は体を動かすために必要なもの、炎は人類が進化するために必要だったもの、つまり、遥か昔から人類が五感で感じていたものが取り込めます」
淡々とした口調で答えるユウナ。
「正解です。レイ君、ユウナさんを見習うように」
ユウナの答えに満足した先生はレイを戒めるように言う。
「あいあいさ〜」
レイはもう飽きたのか手をひらひらさせながら聞き流している。
「それでは……リーザ先生、どうかしました？」
突然教室に入ってきたリーザ先生、何やらダリス先生に耳打ちをしている。何かあったのか？
話しが終わったらしく、リーザ先生は足早に帰って行った。
「今日はどうやら魔法管理局員がこの学園に来ています。なので授業は急きょ、魔法理論から実戦に変わります。１０分後に闘技場に集まってください」
どうやらお偉いさんが学園に来たようだな。
「いゃっほう！　実戦だぜ！　闘いだぜ！　バトルだぜ！」
魔法理論が死ぬほど嫌だったんだろう、バカ（レイ）が１人狂気乱舞していた。　俺は疲れてるっつーのに、何て体力だよ、戦闘狂め。「はぁ、実戦かよ、疲れるな」

俺はため息とともにやる気も吐き出す。もともと無かったが。
「何言ってんのよ？　退屈な授業よりスリルに溢れた授業のほうが良くない？」　ここにもいたのか戦闘大好きっ娘め、授業が始まる前の疲れたはどうした？
「おそらくは実力を測るために魔法管理局の方が提案したのでしょう、そして一番優秀な私たちが選ばれたわけですか」
ユウナが独り言なのか話し掛けているのかわからないがまぁ十中八九そうだろうな、まったく、俺らは見せ物じゃないのに。
「早く行こうぜ！」
レイは待ちきれないのか、俺らを急かす。仕方ない……か。
「そんじゃ、お望みどおり実力を見せてあげますか」
そうして俺たちは闘技場に向かった。
ーー
ーーーー
ーーーーーー

闘技場は円形に並ぶ観客席、その中央にはだだっ広い石畳が敷かれている。イメージ的にはローマのコロッセオを想像していただきたい。勿論、観客はいない。
俺たちは闘技場にたどり着き、闘技場の中心にいるダリス先生に声を掛けた。「やっと来ましたね。それではこれから実戦形式の魔法訓練を始めます。今回はゲストとして魔法管理局のクリス・パーシアス管理員と妹さんのリズ・パーシアスが来ております。これは訓練ですが、学園の恥にならぬように頑張ってください。」
リズとクリス……どこかで聞いたような？
「リズ・パーシアスとクリス・パーシアス！？　なんでそんな有名人が来てるのよ」
フィリアは驚愕したようで、悲鳴のような声をあげていた。
「フィリアは知ってるのか？」
よかった。フィリアは知ってるみたいだ。

「あんたわからないの？　最年少の管理局員、兄のクリスは2年前、１６歳にして管理局にその才能を買われ、管理局入りを果たしたレイジ使いの天才、妹のリズは今年１５歳、だけど兄と同等の才能と優れた演算能力を持ち、来年から管理局入りを約束されているのよ」
俺に分かりやすく教えてくれるフィリア、呆れている表情は俺には見えない、軽蔑するような目なんか絶対に見えない。
「そんなに凄い実力者なのか、ん～、でも違うな、俺はもっと前に聞いたことがある気がする」

「お兄ちゃん！」
ふいにそんな声が後ろから聞こえた。誰かが走って近づいて来る。
「グハッ！」
訂正、突っ込んで来た。「会いたかったよ～、お兄ちゃん」
顔をうずくませ、涙ぐみながら小さな少女はそう言ってくる。
だがしかし。
「俺に妹はいないぞ？　人違いじゃないか？」
俺に妹はいない、これは事実。今は……ってかずっと両親がどっかに旅してるので、俺は1人暮らしだ。「ひどい！　お兄ちゃんはリズがまだ小さかった頃一緒に遊んでくれたじゃない！」
小さい頃……あぁ、思い出した！
「リズか！？　大きくなったなぁ～、ていうことは……」
俺はあいつの顔を思い出しながら後ろを見る。
「お久しぶりです。リアンさん」
昔と変わらない堅苦しい言葉使い、忘れもしないさ。
……さっきまで忘れてたのはご愛嬌。
「クリス！　久しぶり！　１０年振りだな、しかしびっくりしたぞ、管理局員になったんだってな」
やっぱりクリスだった。俺は嬉しさを隠しきれてないだろう。声が弾んでいたのがわかった。
「既に2年前の話しですけどね、本当は僕1人の予定だったのです

がリアンさんがいることを話したらリズが駄々をこねまして、仕方ないからリズは学園の見学者として連れて来たんですよ」
クリスも笑顔を浮かべながら話す。
「そうだったのか、しかしお前のその言葉使いは相変わらずだな。見た目は変わったけどな」
１０人に聞いたら全員がイケメンと言うであろう顔立ちに髪型は耳がかぶるくらいの長さでストレート、色は少し赤みがある茶色だ。
「これは地ですから、それに尊敬するリアンさんだからこそですよ。リアンさんがいなかったら今の僕はありえませんから」
苦笑しながら答えるクリス。
「でも同い年なんだしもう少し崩してもいいじゃないか」
それでも俺は食い下がる。敬語はムズ痒いからな。「尊敬に歳は関係ありません、しかしどうして何も言わずに引っ越したんですか？　リズを宥めるのに苦労したんですよ？」
手を横に振りながらやんわりと断る。水掛け論になると思ったのか、話題を切り替えてきた。
「あぁ、それは……」

「リズを無視しないで！　ずっと寂しかったんだから……」
リズが会話に割り込んできた。
俺の服の裾を掴み、涙目に言ってくる。
「ごめんなリズ、何も言わないでいなくなって」
俺はリズの頭を撫でながら言う。
「しかし昔から可愛いかったがますます可愛くなったなぁ」
見事としかいいようのない金髪の髪をツインテールにして、顔立ちもさることながらそのあどけない表情と仕草で可愛いらしさにさら拍車を掛けている。
「えへへ、そう？　でもこうして会えたし褒めてくれたから許してあげる！」
どうやらリズから許してもらえたようだ。よかったよかった。

「おいリアン、こいつらは知り合いなのか？」
レイが聞いてきた。まぁそりゃ気になるか、みんなが言う有名人と俺が知り合いだったらな。
フィリアとユウナも驚いた表情のまま固まっている。なかなかに面白いな。
「悪いな、久しぶりの再会に盛り上がってしまった。こいつらはクリスとリズ、俺が小学校の時の友達とその妹だ。俺が８歳の時に引っ越したから１０年振りの再会なんだよ」
俺は初めに軽く紹介をした。
「挨拶が遅れてすみません。クリス・パーシアスと申します。以後お見知りおきを」
クリスが少し慌てたように自己紹介をする。
「リズ・パーシアスです！　よろしくお願いします！」
リズが元気よく続く。

「よろしくな！　俺はレイ・クロードだ！　レイって呼んでくれ」
レイも自己紹介をする。既にくだけた話し方だがこちらのほうが親しみやすいだろう。
「私はフィリア・クランベル、よろしくね。リズちゃんもよろしく」
クリスとは握手をしながら、リズには手を振り挨拶をする。
「私はユウナ・ハーティリーです。よろしくお願いしますね、クリスさん、リズちゃん」
各々の自己紹介を終えるとそのまま俺のことを置いていき、俺の話しで盛り上がる。昔の俺の情報と今の俺の情報を交換しあっているのだ。
「リズ達とお兄ちゃんが初めて合ったのは、お兄ちゃんが私たちが通っている八極拳の道場に道場破りしに来た時なの、でもやっぱり師匠には勝てなくて……」
はっきり言ってかなり恥ずかしい、言っても聞かなそうだし……どうにかしてこの状況を打破する切り札はないのか。

「んっ！んんっ！」
その時、明らかにわざとな咳をする人がいた。
すっかり忘れていたが今は一応授業中なのだ。
「リアン君がクリス管理局員と知り合いなのはわかりました。ですが今は授業中ですので、積もる話しは後でにしてください。」
妨害したせいか、少し苛立たしげなダリス先生、俺の中の好感度が一気に上がりましたよ。
「そうですよね！　授業はしっかりとやらなきゃいけないですよね！　さっそく始めましょう」
みんなは渋々といった感じで先生の話しを聞いている。ざまぁみろ。
「それでは、そうですね、リアン君とレイ君の模擬試合をしましょう」
俺とレイか。
「「わかりました」」
俺とレイは左右に別れ、戦闘準備をする。他の人達は観客席のほうに向かう。　さて、どう闘うか……
ん？
「クリスどうした？　リズが観客席で待ってるぞ」
クリスが観客席に向かわず、こちらに近づいて来た。
「僕はさっきまではあなたの友達のクリスでした。ですが仕事でこちらに来ているので今からは管理局員のクリスとして見させていただきます」
なんとも律儀なやつだな。そんなこと言うために来たのか。
「わかりました。それではクリス管理局員、今から特とご覧に入れましょう。俺の実力をね」
俺は紳士的な態度で一礼をしながら言った。
「楽しみにしてますよ。成長した『風雷神』の実力をね」
懐かしいあだ名だな。そういえばそういう風に呼ばれてたっけ。
「みんなにはそれのこと内緒にしてくれ」

俺はクリスに頼む。
「なぜです？　あなたの魔法をみたら誰しもが思いつくことでしょう？」
確かに昔と同じならこの学園でもそう呼ばれることだろう。
だけどね。
「ちょっと事情があったからな、今は封印ってか隠してるんだよ、今は風を主に使い、状況によって炎と水を使い分けるただの『風神』だよ」
そう、今はただの『風神』だから、知らなくていい。今はまだこの日常を謳歌していたい。
「それでは！　模擬試合を開始します。クリス管理局員は席に戻って下さい。」
何か言いたげだったが、クリスは諦めて観客席に戻る。
さて、今は目の前のことに集中集中。
「双方準備はよろしいですね？」
「「はい！」」
俺とレイは同時に答える。
「それでは……試合開始！」

授業～魔法理論と魔法管理局員（後書き）

次回からやっと本格バトルだぜ！

それではまたよろしくお願いします。

実戦式魔法訓練と同時魔法（前書き）

バトルって難しいですね。

それではどうぞ

実戦式魔法訓練と同時魔法

「『風神の聖域』」

俺は戦闘が始まると同時に防御用の魔法を使う。

相手は地の超特化型、地は全属性の中で一番用途が広い。炎属性は炎を司り、水属性は水を司る、地属性が司るのは地だが詳しく言うと物質変化と操作だ。　固体を操れる地の基本的な闘い方は敵の足場を崩し、多方向からの波状攻撃型が多いが……

「燃えてきたぜ！！」

レイがゆっくりと近づき、そう言いながら制服の内ポケットから銀の延べ棒を五本ほど取り出している。「小手調べは無し、最初から全力で行くぜ！　錬成『シルバースピア』」

レイが唱えると五本の延べ棒は一瞬にして一つに合わさり、槍状に変化する、その槍は鋭く、鈍い光を放っている。「それじゃあ、行かしてもらうぜ」

レイは鋭い目付きに変わると俺に向かって一気に突っ込み、最速の突きを連続で行う。

「うらうらうら！　どうした！　こんなもんかよ！」

俺は槍の軌道を『風神の聖域』で剃らし、致命傷は避けているが、既にあちこちに傷が出来ている。

「このままじゃヤバイなっと、フィストスタイル『風駆』」

俺は一端レイから距離を取り、槍の攻撃範囲から離脱する。

まずいな……『風神の聖域』じゃあ槍を防げないか。

「魔法使いが1人で魔法を使う場合は原則的に1つしか使えない。別の魔法を併用すると別々の演算を頭の中で同時にしなきゃいけなくなり、脳に負担が掛かるからな。だがセカンドブレインに演算を肩代わりしてもらうことにより、同時魔法と威力の高い魔法が可能となる。そうだろ？　そんな風じゃ俺の槍は防げない、本気で来い

よ。俺はお前の全力と闘いてぇんだ。セカンドブレイン要らずの『風神』リアンさんよう！」
確かに同時魔法も大技も使えるけどな。てかよくそれは覚えてるなお前。
「嫌いなんだよ。フェアじゃない感じで、それにレイの言う通り俺の『風神の聖域』じゃあ槍は防げない、もともとこれは物質系と相性が悪いからな。だけど、これなら……『風神の聖域』変化魔法『風神の手甲』」
リアンが纏っていた風が両手に集約され、あらゆる方向に渦巻いている。
「来いよ。お前の槍は全て受け流す、これでもダメならお望みどおりにしてやる」
半身の構えを取り、攻撃に備える。
「へっ！　なら出させてやるよ！　行くぜ！」
さっきと同じく、レイは突きを繰り出す。
だが今回は……リアンが側面から槍に触れると大きく軌道が逸らされたのだ。
「なんだよこれ！？」
レイは驚愕する。さっきまでリアンは致命傷にならないように逸らすのが精一杯だったのに今回はまったく擦りもしないからだ。
「バリエーションだけは豊富でね！　この『風神の手甲』は手に高密度の風を纏わせ、弾くことに特化した魔法だ。お前の槍はもう意味を成さない」
『風神の聖域』は炎と風の防御に特化した魔法、そして『風神の手甲』は聖域の応用魔法で、武器相手に特化した魔法だ。聖域とは違い、ある程度本人の技術も必要となるため、誰しもが使える訳ではない。
「ちっ！　確かに今のままじゃ受け流され続けてカウンターを受けちまうな」
やはりレイは戦闘に関してだけは鋭く頭が回る、厄介だな……そ

う考えているとレイはいきなり距離を空けて槍を構える。
あの行為に何の意味がある？考えろ。
「……今のままだとな！　『シルバートランス』」
槍は形状を変え、６つの浮遊する玉となる。
あの形状は見たことがないな。レイの新しい魔法か。
「ナンバー１・２・３『ニードル・トラップ』ナンバー４・５『シルバー・ナックル』ナンバー６『パート・シールド』」
浮遊する玉の３つは俺の周りに漂い、１つはレイの周りに漂う、残りの２つはレイの拳を包みこんだ。
「おいおい……これは同時魔法じゃないのか？　いつの間にマスターした……いや、どんなタネがある？」　同時魔法は先ほど説明した通り、別々の演算を同時に行わなければいけない。　この条件をクリアするためには、最低でもマルチタスク能力が必要だ。
そんな頭を使う能力をレイに習得は可能なのか？
答えは否。
「リアンの読み通りこれは同時魔法だが同時魔法じゃない。答えは勝ったら教えてやるよ」
同時魔法だが同時魔法じゃない……か。
情報が足りない現状じゃ答えなんか出るわけない。
「そういうふうに引っ張られると俄然燃えるな。絶対に吐かせてやるよ」
レイ（バカ）に教えてもらうのは癪だが気になるからな。
「だから勝たせてもらう！　フィストスタイル『風駆』」
俺は『風駆』を使い、レイとの距離を一気に詰める。
「『風神の聖域』変化魔法『風神の手甲』」
何にしても闘わないと始まらない。
「リアンはやっぱりそうこなくちゃな！　うらぁ！」
レイが渾身の力を込めて殴りかかってくる。
「変化魔法『風推手』」
リアンの手にあらゆる方向に渦巻いていた風はリアンが唱えると

一定の方向に渦巻きを変えた。
そしてリアンがレイの拳を受け流すように合わせると、さっきまで弾かれてたのに今度は逆に引き寄せられたのだ。
「何！？」
レイは予想外のことに驚き、体はそのまま引き寄せられる。
「『風推手』は流れに逆らわず、相手を引き寄せる。そして！　フィストスタイル『風打掌・螺旋』（ふうだしょう・らせん）」
レイを引き寄せ、そのまま側面に周り、螺旋状の風を纏った掌打を横腹に浴びせる。レイはそのまま吹っ飛び、倒れたまま動かない。
『風打掌・螺旋』はインパクトの瞬間に捻りを加えた掌打と螺旋状の風を相手に打ち込む技で、その威力は拡散せず、面ではなく、一点に集中した攻撃となる。
「俺の螺旋は体の中に入り、内臓系にダメージを与える。でもこれで終わりじゃないだろ？　早く立てよレイ」
内臓系にダメージがいっていたら普通の人なら立つのも困難だ。だがしかし。「ばれてた？　てかお前内臓はヤバイって！　一応これは訓練だからな？」
何事もなかったかのようにレイは立ち上がる。
予想はしてたけどちょっとショックだった。
「大丈夫だ。後遺症は残さないようにしたから、それよりお前の槍のほうがヤバイだろ！　一歩間違えたら死一直線だからな！」
槍はヤバイって、俺の身体中浅いけど傷だらけだし。
「まぁそんなことはどうでもいい。まったくダメージ受けてないじゃないか？」
そう、レイは何事もなかったかのように立ち上がった。それが不思議でならない。
「玉だよ。ほら」
レイはリアンが突いた横腹を見せると銀色に光っていた。
「『パート・シールド』は俺が思った場所に銀の盾を作る。一部だけだけどな」　なるほどね、銀の盾に守られて内臓にはダメージが

いかなかったわけか。
「なかなかに厄介な能力だな……」
普通に感心した。レイが攻撃だけでなく防御にも気がまわるとは思ってなかった。
「お前の風のほうが厄介だろ！　なんだよそれ！　近距離戦無理じゃん！」
まぁ確かに俺のを破るのは難しいけどね。
「でもちゃんと近距離戦でも弱点あるよ」
あっさりとした感じで言う。
「マジで！？　何だ弱点って！？」
こいつはバカか？　あっ、バカだった。
「敵に教える訳ないだろ、不利になるからな。俺に勝ったら教えてやるよ。」
当然のことを言う俺、当たり前のことだからな。
「なら勝ってやるよ。ナンバー４・５『シルバー・ボウ』錬成『ストーン・アロー』」
レイは銀の弓と石畳から矢を作る。
「近距離がダメなら遠距離で行くぜ！　『ストーン・ニードル』」
リアンの足元から石で出来た針のようなものが飛び出す。
「これくらい避け「発動！」」
俺が『ストーン・ニードル』をかわすと同時に今まで何の動きも見せなかった銀の玉が針状になり襲ってくる。
「くっ！」
リアンは躱し切れず肩に刺さる。さらには矢の追撃がリアンを待っていた。
リアンは体を捻り、矢を間一髪のところで躱すことに成功した。
「三重の攻撃だったのに１つしか当たらないとはな～、俺のとっておきだったのに、へこむぜ」
そう言いながらもレイの顔はにやけていた。
「何言ってんだよレイ、顔がにやけてるぞ。」

「だってよ、ワクワクしねぇか？　条件はクリアしたんだぜ」
やっぱり気付かれてるか。
「そうだな。レイが遠距離で来るなら俺の『風神の手甲』は使えない、使っても『ニードル・トラップ』が来るからな。約束通り俺の本気を見せてやる」
レイには驚きっぱなしだよ。本気を出そうか。
「風術『風神の令』を行使、レイの周りの酸素濃度を上げよ。知ってるか？　酸素が多いところで火を使うとどうなるか？」
俺がそういうのと同時に思惑に気付いたのかレイが駆け出す。だが今さら遅い。
「風火術『爆』」
レイの辺りに爆発が生まれる。
「ちっ！　全ナンバー『オーバーシールド』」
レイはバックステップをしながら銀を総動員して大きな盾を作り、辛くも防ぎ切る。だが…
「意味ないな……風火術『爆・波走り』」
俺は目標の周りの酸素と言った、それは常に適用され、目標が動いても酸素の道が残る。
そして……
「その道をたどり、連鎖的な爆発が起こる」
辺りはまばゆい光に包まれた。

実戦式魔法訓練と同時魔法（後書き）

アドバイス、誤字脱字のご指摘、感想などお待ちしています。

人物設定＆魔法（前書き）

戦っている主要人物お二人の紹介と魔法の説明です。
作品中でも説明はありますがまとめということで書かせていただきました。

それではどうぞ

人物設定＆魔法

リアン・ハーベル
１７歳
　ファンタズム学園に通う高校三年、取り込んでいる属性は風２つ、炎１つ、水１つのバランス型、風を主に扱い、その姿から『風神』と呼ばれている。
　近距離用のフィストスタイル、遠距離用のガンスタイルを使いこなし、臨機応変に戦う。

魔法
フィストスタイル
『風駆』（ふうく）
　体軽くし、文字通り風のように駆ける。

『風打掌・速』（ふうだしょう・そく）
　風で打ち出す速度を上げた掌打。

『風打掌・螺旋』（ふうだしょう・らせん）
　インパクトの瞬間に捻りを加えた掌打と螺旋状に渦巻く風を相手に叩き込み、面ではなく、一点に集中した一撃。
　体の中に振動が伝わり、内臓系の機能を狂わす。

ガンスタイル
『風弾』（ウインド・バレット）
　風を小さい玉状に圧縮し、相手に打ち出す。

『嵐弾』（ストーム・バレット）

『風弾』を高速で連射する。

スタイルなし
『風神の聖域』
身体中に風を纏わせ、攻撃に対して最適の防御を行う。だが槍や剣などの物理攻撃に対しては弱い。

『風神の手甲』
『風神の聖域』の派生魔法。手に高密度の風をあらゆる方向に渦巻かせ、弾くことに特化した魔法。

『風推手』
『風神の聖域』の派生魔法。『風神の手甲』とは違い一定の方向に風を渦巻かせることにより、相手を受け流すことに特化した魔法。

同時・大魔法
風火術『爆』
相手の周りの酸素濃度を上げ、炎の魔法で擬似的な爆発を起こす。

風火術『爆・波走り』
相手が移動をしても酸素の道をたどり、追尾する。

レイ・クロード
リアンと同じクラスで取り込んでいる属性は地４つの超特化型、内ポケットに入れている銀の延べ棒を変化させて戦う。

魔法
『シルバースピア』
銀を変形させて槍の形にする。

『シルバー・ナックル』
銀を拳状に変形させて、威力を上げる。

『シルバー・ボウ』
銀を弓に変化させる。

『シルバートランス』
複数の銀の玉を作りだし、それぞれに命令して、複数のものを錬成する形態
詳しくはこれからの作中にて。

『ニードル・トラップ』
相手の周りに銀の玉を漂わせ、キーワードとともに針状に変化し、相手を襲う。

『ストーン・ニードル』
石を針状に変化させ、相手を攻撃する。『ストーン』の部分は変化させる材質によって変わる。

『ストーン・アロー』
石で作った矢、『ストーン』の部分は材質によって変わる。

人物設定＆魔法（後書き）

今回は2人だけですが、後々他の人物も書かせていただきます。

アドバイス、誤字脱字のご指摘、感想をお待ちしています。

訓練終了（前書き）

今回は短いな～

それではどうぞ

訓練終了

爆炎により発せられた光は徐々に明けていき、見えるのは辺り一面に石が転がっているところに倒れている者が一人とそこから少し離れた場所に立っている者が1人いるだけだった。

「それまで！　勝者リアン！」

「勝った……」

身体中傷だらけで肩は動かず、同時魔法まで使うというボロボロな状態だが勝ったのだ。

「リアンちょっとやりすぎです……」

駆け寄って来たユウナが言う。

何のことだと思い、辺りを見渡すと試合場は半壊、観客席はさっきの魔法の影響か一部が粉々になっていた。

「レイは大丈夫か？」

周りがこんなになるほどの威力だ。直撃したならただでは済まない。だけどレイなら大丈夫だろうという確信があったため、呑気な口調で聞いた。

「レイなら大丈夫ですよ。あの時石を卵状に変化させて中に籠もっていたから直撃は免れましたから。衝撃で気絶はしてるみたいですけどね。」

ユウナが説明をしてくれる。

「さすがレイだ」

あの情報から爆炎が来る一瞬の間に錬成するとはね。

「外傷は肩のはひどいですが他はそれほどでもないようですね、これを塗って……『ウォーターリカバリー』　それでは、フィリアが行ったようですけどわたしもレイの怪我の具合が心配なので失礼しますね」

フィリアは俺の肩に塗り薬と『ウォーターリカバリー』を掛けるとレイの元へ走って行った。

肩に水が引っ付くようについている。この世界に回復魔法はない、『ウォーターリカバリー』は傷を治す魔法ではなく自然回復力を上げる効果とともにそれに適した環境を作る魔法だ。　まぁ、通常の約１００倍治癒力が上がるのだから回復魔法とも言えなくはない。
　それに塗られた薬は破壊された細胞とくっつき、再生させる最新医学が生み出したもので傷がみるみるうちに治っていく。見ていて気持ちよいものではない。「カッコよかったよ！　お兄ちゃん！」
　俺に飛び付いて来たリズ、やっぱり可愛いな。
「同時魔法を出さないとリアンさんが勝てないとは……彼もテトラマスターですか？」
　ふいに後ろから話しかけられた。振り向いてみると……てか声でわかるけど、やっぱり、クリスだった。「リズ、ありがとね。レイは地４つの超特化型だからテトラマスターだな。」
　リズの頭を撫でる。クリスが呆れてる気配がするが撫でながら言う、やめる気はない。本人も嫌がってないし、いいじゃん！
「それにしてもあの６つの玉は何ですか？　同時魔法のように見えましたがセカンドブレインは、いないようですし、僕たちと同じ能力を持っているとは思えません」

　確かにレイは同時魔法を１人じゃ放てない、俺のようにセカンドブレインなしで同時魔法放てるのは大体は魔法管理局に引き抜かれるからな。６つの銀の玉については……
「本人に聞いたほうがいいだろ？」
　フィリアに肩を貸してもらってレイがこっちに来てるからな。
「使えって言ったのは俺だけどな、もうちょい威力加減しろよ！！
　一歩間違えたら死だぞ！？　ＤＥＡＤだぞ！？」
　レイが騒いでる。マジでうるせぇ、否があるのは加減間違えた俺だから何も言えないんだけどな、こういう時は……
「何を言っているんだ？　全力出さないとレイには勝てないと思ったからあの威力になったんだ。それでも外傷１つなく気絶だけだっ

たんだからレイは強いよ」
褒めてやり過ごす。
「そっ、そうか？　まぁ俺だったら当然だろ！」
ふっ、勝った。
「それよりも約束を守れよ。あの６つの銀の玉はどうやって複数の魔法に変化したんだ？」
そこで話題を畳み掛ける。これで俺のことは雲散霧消したぜ。
「あぁ、あれな、簡単に言えば事前にプログラムを組んだんだよ。ディレイマジックの応用で俺の言葉をキーワードにして発動させる。名付けてプログラム魔法だ」
機嫌を良くしたレイは声高々に説明をする。
「なるほどな、レイの魔法は武器系が多いから一度作れば演算は必要なくなる。演算が必要になるのは『ニードル・トラップ』だけになるから同時魔法ではないってことね」
ディレイマジック（遅延魔法）の応用か、レイの発想は凄いな。
そう談議をしていると先生がやってきた。どうやら闘技場の被害状況の確認が終わったようだ。
「レイ君、リアン君、素晴らしい試合でした。レイ君には目に見える怪我はないようですし、リアン君のは治ってますね。今日はこのまま帰ってもらって結構です。お疲れさまでした。これにて授業は終了です。」　そう言うと先生は帰っていった。
やっと帰れる。愛しの我が家へ、いざ行かん。
「お兄ちゃん家に行く！」　と、この可愛い困ったちゃん（リズ）が言っておりますよはい、まったく、俺の１人の空間を壊すとは。
「いいかリズ、俺はもちろんオッケーさ！　クリスと一緒に来なよ」
断れませんよ。そんな鬼畜外道になんかまだ落ちてませんから、ヘタレなわけではない。
「それじゃあリアンの家でリズ、クリスとリアンの再会パーティーをみんなで開こうよ！」
このフィリアめ……まためんどくさい企画を提案しやがって、こ

れはいらんな。
「そんなことする必要は……あるね！　大歓迎さ！　それじゃあみんなで食材を買って行こう」
断れませんよ。リズが天使のような笑みを目を輝かせて向けて来るんだもん。　鬼畜外道以下略。

こうして、疲れる1日はまだまだ終わらなかった。　食費ってもしかして俺持ち？

訓練終了（後書き）

さてはて、これからどうなるのでしょうか？

誤字脱字、アドバイス、感想等をお待ちしております。

レッツパーティー！（前書き）

遅れました。

それではどうぞ

レッツパーティー！

学校の帰り道、俺たち６人は、１０分ほど歩いたところにあるそびえたつ建物の前に来ている。自らの存在をアピールする看板、建物の横にある駐輪場、主婦達の闘争本能を掻き立てる特価情報の貼り紙、庶民的な食べ物に雑貨物まで売っている万能の店。

つまりはスーパーに来ている。

「スーパーに着いたな」

はっきり言ってやる気が出ない。勢い余って承諾してしまったが今は後悔していて反省もしている。流されるのは駄目ですね。

直したいなぁ～、この流されてしまう性格、通知表にも書いてあった気がする。

「んで？　パーティーやるのはこの際いいとして何にする？」

まずは食材を買うのだが何の料理を作るのか決めていない。行き当たりばったりな企画だから仕方ないけどね。

「お前に任せるぜ！　リアンが作ったのなら何でも美味いからな」

「……は？」

いかん、この歳で耳が遠くなるとはヤバイな。

「だから、リアンに任せる」

どうやら俺がおかしいんじゃなく、レイがおかしいようだ。

「レイ、このパーティーは何を祝うんだ？」

俺はレイに優しく問う。
「いまさら何言ってんの？　クリス兄妹とリアンの再会パーティーに決まってんじゃん」
レイは呆れた口調で言う。ここは我慢だ。きっとレイなら理解してくれる。
「つまり、主賓は誰だ？」
これで理解してくれただろう。やっぱり物事は順序立てて考えるのが一番分かりやすいね。
「リアンとクリス達だろ？　自分のことだから舞い上がって混乱してるのか？」
予想外ですね。全てを理解していて俺に作らせるつもりかこんにゃろう。
「私たちも手伝いますから……ね？」
優しいユウナは手伝ってくれるらしい。それでも俺が作ることに変わりはなかった。
「あぁ、わかったよ。作ればいいんだろ？　みんなに振る舞ってやるよ。」
「やったぜ！」
はしゃぐレイとは対極的にテンションがだだ下がりな俺がいる。
まぁとりあえず大勢が食べれて一気に作れるもの……カレー、いや、煮込むのに時間が掛かるから却下、鍋、さすがに初対面の人がいる

のに直箸というのもなぁ、分けるのは違和感があるし……

「パスタでも作るか……」

一気に作れるし、ソースにもたいして時間は掛からないからな。

「パスタ大好き！」

リズも喜んでくれてるし反対意見もないな。じゃあ決定。

しかしリズ、子供っぽ過ぎないか？

「ソースはトマトベースのさっぱりしたやつにしよう」

そうと決まればさっそく中に入ろう。

ーーーー

ーーーーーー

ーーーーーーーー

場所は変わり、リアンの自宅、３ＬＤＫという1人で住むには少しばかり広く、ひどく殺風景だった。リビングの白い壁にはカレンダー以外のものは一切なく、何の装飾も施されていない。真ん中にテーブルが置いてあり、椅子はテーブルとセットで買ったのだろうか、３人家族なのに４脚あった。窓のほうにテレビ、そしてそのテレビを見るためであろうソファーが設置してある。ゲームが好きなのか、テレビの横には様々なゲーム機種が置いてあった。

「リアンの家は相変わらず殺風景だな～」

とレイの余計な一言、こいつは人の家に入っておいて何だよその言い草は、物が少ないのは必要ないからだ！

「私は入るのは初めてです。フィリアは？」

若干緊張でもしているのか、強ばった表情を見せている。ちなみに女の子を入れたことはない。
何だろう？　この虚しさは。

「私も初めてだよ。男の子の部屋っていうか家にしては酷く殺風……片付いてるね！」

フィリアの優しさが心に響くぜ……出来れば、言い直す前の言葉が容易に連想出来るので、発する前に考えて欲しかった。
何だろう？　俺の部屋が歪んで見えるぞ。

「お兄ちゃんは趣味のない淋しい人なんだよね！」

俺のガラスのハートは崩れ去りましたよ。とりあえず俺の心の汗は溢れて来る。
俺はふらふらと玄関に向かう。

「今から電器店に行ってネジばっか買い込んでやる！　単1電池ばっか買ってやるよ！　両面テープも大量に買ってやる！」

もう自暴自棄です。殺風景が嫌いなら綺麗なネジと単1電池の花を部屋中に咲かせてやる。

「ちょっと待て！　何でそんな使い所がありそうでないものばかり選ぶ！？　悪かったから！　謝るから許してくれよ。」

まぁ実はそこまで怒ってはない。だだちょっと傷ついてノリに乗っただけだ。このへんで許してやろう。　クリスも苦笑いだしね。
「冗談はさておき、さっそく作るぞ、フィリアとユウナは手伝ってくれ、料理は3人で充分だから男性陣とリズはテーブルと食器の用

意だ。ってもまだ用意はしなくていいから適当に遊んでてくれ、後で呼ぶ」

みんな快く承諾し各々が動き始める。

さて、作るか。

俺とフィリア、ユウナはキッチンへと向かう。とは言ってもリビングとキッチンは繋がっているのでたいした距離ではない。そして男性陣はまだ役目がないのでゲームをやるようだ。

くそ～、羨ま……いや、ここは我慢だ。女子2人に囲まれて料理が出来るんだ。逆にラッキーだと思っておこう。

それでは始めよう。今日は茄子とトマトソースのパスタです。

「ユウナは茄子を半月状に切ってくれるか？　フィリアはフライパンとパスタを茹でるお湯の用意を頼む」

俺はニンニクをみじん切りにする。匂いがつく作業は女子にやらせたくないからね。

「フィリアは終わったらフライパンにオリーブ油を入れて熱してくれ、そのまま茄子を炒めてくれると助かる。ユウナはパスタを茹でてくれ」

俺はトマトホール缶を開けて、味を整える。さすがにソースを始めから作るのはつらいから許してくれ。

「茄子に火が通ったらニンニクを投入、色がついてきたら、トマトソースを入れて煮込むぞ。レイ、クリス！　食器とテーブルの用意を頼む」

ここまできたら後は簡単、パスタをフライパンの中に入れて絡めたら出来上がり。

ざっとこんなもんだな。出来上がった料理をテーブルに並べたら終了。椅子はさらに丸椅子を2つ用意してあったのでみんなが各椅子に座る。

「まっこんなもんだな。かたっくるしいのは無しにしてみんなで食べようか、それでは、いただきます」
みんなも食べ始める。
「うまいな！」
「美味しいですね。トマトの酸味とニンニクアクセントが合っています」
どうやら好評のようだ。みんな思い思いの感想を言ってくれる。リズは一心不乱に食べ続けている。まぁ美味しいということだろう。
「んで、クリス達とリアンはどういう知り合いなんだよ？」
とレイが食べながらクリスに質問をする。まぁ気になるだろうな。
「簡単に話せば、道場で知り合って、僕がリアンさんに教えてもらってたんですよ。実力はリアンさんが一番でしたからね、武術も魔法も。しばらくはそういう関係が続いたんですけどね、ある日突然リアンさんがぱったりと消えたんですよ。引っ越しという形でね。だから意外に期間は短いですよ。一年間くらいです。」
クリスが簡略化しながら俺についてみんなに話す。なんか恥ずかしいな。
「リズはね、最初はお兄ちゃんが恐かったの、いきなり師匠に挑むくらいだったから、だけどね！　リズが大切にしてたお人形をなくした時に一緒に探してくれたの！　見つかるまでずっと探してくれたからお兄ちゃんのこと好きになったの！　それからいっぱい遊んでもらった！」
リズが元気一杯に話す。トマトソースを口につけながら、見ていて可愛い。
「レイさんたちはリアンさんとはどういった経緯でお知り合いに？」

リズの口元を拭いながら、クリスが聞く。

「そうだな、俺は小学校の時からリアンとは友達だな。転校してきたリアンが何でも出来るやつだったから喧嘩吹っかけてやったんだよ。それから仲良くなった。やっぱり男は拳で語り合うものだよな。」

レイが腕組みをしながら何度もうなずく。

「私はファンタズム学園に入学してからかな、同じクラスになって、それから意気投合した感じ、私たちのクラスは人数少ないからね」

最初は俺含めて3人しかいないのにびっくりしたな、その時は女子1人だったから心細かっただろうな……フィリアはそんなのとは無縁か。

「何かイラってきた」

フィリアがこっちを睨み付けてくる。

「何も考えてないっす！　気のせいだよ」

お願いだから、超能力みたいなその勘をなんとかしてくれ。

「私は二年の頃にSクラスに上がってからですね。実はリアンに憧れてSクラスに入ったんですよ？　風紀委員の時助けてもらってからずっと憧れていたんです。」

予想外な暴露をしたユウナ、そんな理由でSクラスに入ったとは、

ちょっと……いや、かなり嬉しいな。　そんな出会い話しで食事は終わり、その後も話し続け、あっという間に時間は過ぎていく。既に時刻は9時を過ぎていた。

「おっと、もうこんな時間だな。今日はもうお開きにして帰るか」

レイがそう言いながら立ち上がる。今日は帰るみたいだな。

「そうですね。僕たちも帰ります。報告書も書かないといけないですし、ほらリズ、行くよ」

明らかに嫌な顔をするリズをなだめるクリス、それでもリズは嫌なようだ。

「リズ、今日は楽しかったよ、また遊びに来てくれ。いつでも待ってるからさ。」

リズは笑顔になり、遊ぶ約束をする。これで大丈夫だな。

「それでは、私たちも帰らせていただきます」

「今日は楽しかったよ」

とユウナとフィリアも帰る支度をする。

「そうだクリス、これ俺の連絡先だから、何かあったら連絡してくれ。」

「ありがとうございます」

俺はクリスに連絡先を渡す。何かあったら駆けつけられるからな。

「それじゃあねお兄ちゃん！　また遊ぼうね！」

元気よく手を振るリズ、久し振りに会って別れるのはやはりいつでも会えるとしてもやはり悲しい。

「それじゃあまたな、クリス、リズ。レイたちはまた学校で」

そうして1日が終わった。

レッツパーティー！（後書き）

誤字脱字、アドバイス、感想等お待ちしています。

セカンドブレイン（前書き）

遅くなりました。

それではどうぞ

セカンドブレイン

クリスたちとの再会を果たした翌日の土曜日。時間は朝６時だがリアンは既に起きていた。

床一面に青色のカーペット、部屋の隅に置かれた高級ホテルなどのふかふかなものではないが、一般的なベッド、そのすぐ横に学生の部屋には大体はあるであろう勉強机がある。机の上にはノートパソコンか置いてあり、横には学校の教科書やらが無造作に置いてある。その机の逆側には本棚が置いてあり、マンガなどはなく、魔法概論や化学についての高校生では持たない本がびっしりと置いてある。それ以外には何もない。白い壁にもポスターなどもなく、風よけの役割を果たしているだけだった。

そんな部屋の中、リアンは日課の訓練を始める。

「風」

リアンがそう呟くと目の前にパチンコの玉のように小さな緑色の玉が出て、よく見てみると渦巻いていて、所々が透けている。

「炎」

同じように言うと緑色の玉の隣に赤というよりオレンジ色に近い玉が出現し、同じように見てみると揺らめいている。

「水」

同様に水色の玉が形成されようとするが消えてしまう。それと同時に他の玉も消える。

「やっぱり２つまでか……」

自分の他に誰もいない空間で眉間にシワを寄せて、ため息混じりに呟く。

リアンの日課は魔法制御と同時魔法の訓練だ。今は同時魔法の訓練をしている。

同時魔法には２つあり、同じ属性の魔法を同時に使うタイプと異なる属性を同時に使うタイプがある。前者のタイプは多くはないが

いるにはいる。だが後者はかなりどころか物凄く難しく、扱える者は少ない。だから扱うだけで称賛されるほどのことなのだがリアンは満足していない。更なる高みへと向かうために日々努力しているのだ。

「やっぱり対極に位置する水と火を同時に扱うのは難しいか……」

それぞれの魔法を現実のものにするのはイメージが必要なのだ。強いイメージが。例えば水を出すならそこに丸い水色のものがあり、それは冷たくて液体だ。などのものをイメージしなくてはならない。魔法を現実にするためと威力に関係するのがイメージ。

演算はコントロールに関係する。その場の湿度、温度、風速、距離などを計算する。限りなく難しいことなのだが、魔法を手にすると感覚が上がるのか、それともＤＮＡに入れた時の変化なのか、大体は掴めるようになり、無意識に計算が出来る。

演算の差はそこからどれだけ正確な数値を導きだせるか、意識的にどれだけ早く行えるかになる。

「ってやば！　遅刻する！」

時間は既に７時４０分、普通の人たちは土曜日は休みであるが、ファンタズム学園に通う者は違う。土曜日も学校があるのだ。通常授業とは異なり、魔法授業一色の日。

リアンは急いで制服に着替え、学校へと向かう。

「フィストスタイル『風駆』」

遅刻しないために加速したリアンは魔法ってつくづく便利だよねぇと思うのであった。

「間に合った～」

ただいまの時刻は８時２５分、授業が始まる５分前に着いたので意外に早く着いた。

見回してみると、フィリア、ユウナ、レイの３人が既に席に……３人？

俺はすぐに臨戦態勢に入る。
「残念だったなレイの偽者、姿形は完璧だが行動がまるで似ていない。あのレイが授業開始5分前に席に……いや、教室にいるだと？
そんなことはあり得ない、毎日と言っていいほど一時間目の授業は先生と授業の開始はチャイムが鳴ってからか、それとも完全に鳴り終わってからか議論を繰り広げている男だぞ」
いつもレイは時間ギリギリに来るので、いわゆる遅刻魔なのだ。だからいつも遅刻の数を減らそうと、先生と無駄な議論を繰り広げている。成功したことはない。
ちなみにうちの学校ではチャイムが鳴ってから授業開始のようだ。
「ふっふっふ、よくわかったなってんなわけねぇだろ！　俺だってたまには早く来るんだよ！」
適度なノリツッコミをした後怒鳴るようにまくしたてるレイ。
「だって今日はセカンドブレインが返ってくるんだもんね、だからレイは待ち遠しくて早く来たんでしょ？」
矢継ぎ早に質問をするフィリアだったが質問というよりは確認に近かった。
「そのとおりだよ！　やっぱないと不安だからな」
そういえば今日はセカンドブレイン返却日だったか、自分にはないので忘れてたよ。
「だから昨日の試合で使わなかったのか」
昨日セカンドブレインを使っていれば最後の一撃も難なく防げたことだろう。「確かになかったことも理由だけどな。俺とリアンの実力差ってやつを肌で感じたかったんだ。ふっ飛ばされたけどな」
そんな他愛ない会話をしているとチャイムがなり、それと同時にダリス先生が入って来た。
「皆さんおはようございます。今日はみんな揃っていますね。レイ君が既にいるとは……傘を持って来るべきでした」
「ワォ！　俺が遅刻してくるのは既にデフォルト？　早く来たら天候が晴れから雨に変わるレベルなのかよ……」

レイが先生にまで言われて傷ついたようだ。いじけている。
「冗談はさておき、今日は点検に出していたセカンドブレインを返却します。アップデートもしてあるので慣らしておいてください。」
そういいながらケースを取出し、開けて中身を見せる。中には青い宝石の付いた指輪、赤い水晶玉の付いたイヤリング、茶色のブレスレットが入っていた。
「待ってたぜ！」
先ほどとは１８０度違うテンションではしゃぐレイ。こいつの気持ちの切り替えの早さは尋常ではない。　それぞれが己の物を取りに行く。ユウナが指輪、フィリアがイヤリング、レイがブレスレットだ。当然だが俺にはない。
「具体的に言うと起動速度の上昇、処理能力が向上してありますので、唱えてからのラグが少なくなっています」
つまりはセカンドブレインを介しての魔法がより早く出せるということだ。
レイたちは喜びを隠し切れない様子だ。この喜びだけは共有出来ない。俺は持っていないから、いつもこのシーンを見ていると俺も欲しくなる。だけど俺は持たない。余りにも強い力は慢心を生み出し、弱さが生まれる。俺はそのことを知っている。別に持つのを禁止されているわけではないが、自分で戒めている。
「よかったなお前ら！」
だから俺は笑って言う。なくとも充分戦えるから、この寂しい気持ちを隠したいから、俺は笑う。
「それではセカンドブレインを装着した後、闘技場に集合します。今日はあなたたち三年生のＳクラスには全学年の前で魔法演技を行ってもらいます。」
去年、俺達はその演技を観客側で見ていた。行ったのは男女の２人で、男のほうは雷を使った龍を作りだし、女のほうは火を使った虎を作り出して戦わせていた。かなり派手な演出だったので無我夢中で見ていたのを覚えている。今年は俺達ってことか。

「内容は自由ですがなるべく大きく派手なものにしてください。この魔法演技にはこれから起こるであろう暴動や喧嘩の抑止力という意味もあるので」
部活の勧誘やいざこざなどは例外なく魔法を使用し騒ぎが大きくなる。校則を破ったら実力のある者が裁きに来るってことを先に教えておくのが目的ってことね。
「よっしゃ！　俺らの実力をいっちょ見せつけてやろうぜ！」
レイは張り切っていて、フィリアとユウナは大舞台ということ緊張した顔をしている。かくいう俺も緊張している。全学年ということは全校生徒の前で見せるということなので失敗のことを考えると……
「皆さんの実力なら大丈夫です。ファンタズム学園のSクラスの生徒なのですよ？」
先生が緊張していることを察したのか、励ましてくれている。
「そうですね。私達ならやれますよね！」
その言葉に励まされたのか、自分に言い聞かせるように言うユウナ。それに賛同するように皆もうなずく。
「それぞれの特性を生かして頑張って下さい。それでは闘技場に向かいます」
そうして僕たちは闘技場に向かった。
そして向かいながら考えた。何故事前に教えてくれなかったのだろうと。

セカンドブレイン（後書き）

今度は早めに投稿します。

誤字脱字、アドバイス、感想、評価等々お待ちしています。

魔法演技（前書き）

遅れたました……

それではどうぞ

魔法演技

１０人も入れば窮屈に感じるような狭いコンクリートの部屋、その中央に置かれた背中合わせに並べられている２つのベンチ、そこに座っている４人、つまりは闘技場の出場者控え室に俺達は待機している。

レイは頭を抱え、フィリアは爪を噛み、ユウナは何かに祈るようなポーズを取っている。

実はみんなは、とてつもなく焦ってます。

それもこれもあの先生のせいです。直前まで何も知らされずに派手なものにしろって？　こういうものは事前に教えておいて、時間を掛けて考えるものではないのか？

「ああもうっ！　全っ然思いつかねぇ、てか属性が地だけで派手なのってなんだよ！　無理だろうが！」

考えるのが嫌になったのか、大声を出して、自分の属性のせいにするレイ。

考えるのを放棄するのはよくないなぁ。見ればフィリアとユウナも妙に悟った表情をしていた。あれが諦めの表情じゃないと信じたい。

「みんな諦めないで考えなよ。もうすぐ始まるんだぞ？」

言った後猛烈に後悔の念が襲う。こんなことを言っても重圧を与えるだけで逆効果だ。きっとみんなさらに落ち込むに違いない。

はい落ち込んだ～、何とも分かりやすくみんな塞ぎ込んだ～、仕方ない。

「みんな、俺に考えがあるんだけど……乗る？」

ーー

ーーーー

ーーーーーー

観客席より上にある放送席からアナウンスが流れてくる。
「それでは、これからみんなに華麗な魔法を見せてくれる3年Sクラスの4人に登場してもらおう！　入場だ！」
俺達が姿を見せると歓声が一気に起きる。注目されるのは恥ずかしいけど嬉しいものだよね。
周りを見ると闘技場の観客席は人で埋め尽くされていた。中には飲み物や食べ物を販売する売り子も忙しく動いているのが見える。
昨日壊した観客席や床はおそらく地属性の先生が直してくれたのだろう、破壊された跡は完全に消えていた。
「みんなはもう知っていると思うがこれも仕事だ！　4人を紹介するぜ！　まずは『紅の戦乙女』こと、フィリア・クランベル、炎3つ、風1つの最高にホットな女子だぜ！　噂じゃ彼女に燃やされたくて違反する生徒も多数いるようだ！　人気者も辛いねぇ」
司会者の紹介に一層盛り上がる生徒達、中に俺を燃やして～みたいな声が聞こえた気がするが。それは空耳だな。
「そしてお次は『水姫』ことユウナ・ハーティリー、水3つ、雷1つの魔法使いだ！　物静かの中に隠れる強い意志は何者にも屈しない。ファンクラブも多数存在！　もちろん俺も入会済みだぜ！」
ファンクラブは確か本人公認というか事後承諾だった。約100人に頭を下げられて、本人も苦笑いしながら（引きながら）承諾していたことは鮮明に覚えている。
「続いては『錬金術師（バカ）』こと、レイ・クロード（バカ）だ！　運動神経（バカ）抜群の熱血漢！　今回は何をしてくれるんだ？」
「まずはお前をぶん殴る！」
副音声でバカと聞こえた技術には脱帽するぜ……。
レイは殴るといってるが俺達の位置からだと観客席より高い所に放送席には絶対無理だろ。
「そしてそして！　最後に紹介するのは、頭脳明晰、容姿端麗、その魔法は全ての人を魅了し、虜にする、その魔法は罪を犯す者への

断罪の一撃と化す。咎人に裁きを下す風紀委員長！　『風神』ことリアン・ハーベルです！」
　歓声が沸き起こり、誰かが魔法を使用したのか、炎やら水やらが上空に向かって吹いている。ずいぶんと恥ずかしい紹介をしてくれるもんだ。
「リアンは人気者で羨ましい限りだ、おっと！　余りの興奮に自己紹介を忘れてたぁ！　今年放送委員の委員長に就任した3年A組のマルク・ミュラーだ。今年中このテンションで行くぜ！　みんな俺のことも覚えてくれよ？　続いてゲストの紹介だ。今日この放送席に来てくれているのはなんと今年就任したばかりのチェスタ学園長！　何か一言よろしくぅ！」
　今日放送席に来ているゲストはチェスタ学園長らしい。普段こういった行事には姿を見せないのに今日に限ってどうしたんだろ？
「ファンタズム学園の長を勤めているチェスタ・クロベットです。本日の魔法演技には期待しているので、全力を尽くしてください」
　まだ２０代であろう美しき容姿は、威厳と傲慢のオーラで固められていて、どこか近寄りがたい存在だった。何でその若さで学園長になれたのかは学園の謎だ。昨年いきなり前の学園長が辞任し、そして別の学校から来たというチェスタ学園長が就任した。
「ありがとうございました。それでは！　魔法演技開始の挨拶と行こうじゃないか！　リアンよろしく」
　スタッフらしきものがこちらに向かって来て、マイクを手渡してくれた。
　さて、どうしようか。
「えー、みなさん、おはよう」
　耳をつんざくような音量でおはようやらキャーやら様々な返しが来た。まさかここまでテンションが上がってるとはな。
「ここで長々と話しをするほど俺は野暮じゃない。１つだけ言わせてくれ、今日は楽しんで、そして……度肝を抜け」
「それじゃ開始だぁ！」

司会者の開始の合図とともに俺達４人は試合場の４隅に立つ。
「セカンドブレイン起動、パスワード、【聖火】、次回からはパスワード記号のみで起動、なお、施行のさいも、パスワード記号のみで行う。」
フィリアはセカンドブレインを起動し、自動起動設定にしている。今やるなよ。
「【聖火】使用、イメージを構築、セット『朱雀』　構築するは炎の化身、その体は炎で出来ていて不死、その一撃は善き者には聖なる加護を、悪き者には灰すら残らぬ獄炎と化す。顕現し！　舞い上がれ！　『朱雀』」
威力が高い上級魔法を使う際の呪文を唱え、フィリアの真上に幾つもの炎の玉が現れる。１つ１つの大きさが優に３メートルは超えていた。炎の玉は上空に上がり、１つとなると形が変わっていき、炎の翼が、炎の爪、そして炎の嘴と構築されていき、『朱雀』が大空に現れる。炎で出来たその姿はこの世に存在が確立していないように揺らめき、神々しかった。
「セカンドブレイン起動、パスワード、【龍脈】、次回からはパスワード記号のみで起動、なお、施行のさいもパスワード記号のみで行う。」
レイも今設定かよ！　もっと緊張感持とうぜ……。
「【龍脈】使用、セット、『玄武』、構築するは星の化身、その体は星の一部から出来ていて不動。その力は悪き者から全てを守る盾であり、善き者を全て受け入れる大いなる力なり！　顕現し！　全てを守れ！　『玄武』」
レイの立っていた場所が盛り上がり、レイを乗せるような形で１０メートルはあるであろう亀がいた。全身が岩で出来ていて表情は無いはずなのだが、どこか優しく見えた。
「セカンドブレイン起動、パスワード、【時雨（しぐれ）】、次回からはパスワード記号のみで起動、なお、施行するさいもパスワードのみで行う」

もう何も言わない。
「【時雨】使用、イメージを構築、セット『青龍』、構築するは水の化身、その体は水で出来ていて流動、その咆哮は全てを揺るがし、その力は大いなる癒しとなる、顕現し！　至らしめろ！　『青龍』」
その言葉と同時に遥か空の雲が一瞬にして消え、代わりにあったのは青い透明の龍、その体は蛇の如く、しかし、その存在に皆圧倒されていた。　次は俺の番か。
「構築するは風の化身、その体は風で出来ていて最速、その早さは見ることすら叶わない、その一撃に過程は存在せず、結果のみ、裁きを下された者は己の死すら感じる前に終焉を迎えるであろう。風神の名の下に命ずる。顕現し！　覚動せよ！　『白虎』」
一陣の風が舞台上に吹く。それは小さな竜巻となり、徐々に大きくなる。
そしてそれが弾けると立っていたのは1匹の虎、しかしその姿は風のように不安定で普通の虎より3倍は大きく、幻想的な雰囲気を出している。その虎が歩くたびに足下から風が起きる。リアンの前にたどり着き、向き合うと虎は忠誠心を見せるように頭を下げる。
静寂、それだけが闘技場を包みこむ。しかしそれも一瞬だった。場内は歓声で湧き上がり、終わりなくそれは続く。
しかし度肝を抜くのはまだまだこれからだ。
《交じれ！》
リアン達4人が叫ぶと朱雀、玄武、白虎、青龍は大空高くに舞い上がり、空中で回転しながら交じり合う。
《四神融合、幻獣『麒麟』》
闘技場の真ん中に一筋の光が落ち、目の前には中国の神の使い、麒麟が立っていた。試合場を一周し、自らの姿を見せ付ける。
「おぉぉぉっと！　実況を忘れていたぜ！　しかし、俺の沈黙こそがこの光景の凄さを語っていると言っても過言ではないでしょう！」
場内は司会者の言葉を口火に歓声をあげる。
麒麟はつんざくような鳴き声を上げると試合場にどでかい雷を落

として消えていく。今回は魅せるだけだからな。演算処理が半端ないのか四人で行っているのに関わらず既に頭痛がする。
だが盛り上がってよかった。急に作ったわりには上出来だな。
「これが風紀委員の力か！　もの凄いものを見せてもらった～！
それではこれで魔法演技を終了にするぜ！」
こうしてぶっつけ本番の魔法演技は終わった。

魔法演技（後書き）

感想・評価・誤字脱字・助言など大歓迎でお待ちしております。

転校生（前書き）

ここから始まる……

転校生

薄暗く広い部屋、端のほうには密封された巨大なカプセル、何台ものパソコンに、何人もの白衣を来た者が忙しなく動いている、奥には更に部屋があり、中にいる男はパソコンの画面に釘付けになっていた。

〔【時雨】使用、セット『青龍』　構築するは……〕　男が見ているのは先日、ファンタズム学園で行われた魔法演技の映像だった。

「3人とも精神力、レイジ共に最高レベル、実験には丁度いいね、しかも国の運営する学園だから僕たちも干渉しやすい、ここを実験場にしよう。準備は出来ているかい？」

男は映像を消し、画面から目を離すと隣にいる女性に話しかける。

「準備は全て滞りなく終え、既に実行中です」

女は早口に答える。

「既に実行中とは仕事が早く、結構なことだが技術開発室主任の僕に話しを通さないのはいけないんじゃないかな？」

男は優しげに言う、顔も笑っていてどこか楽しそうだ。

「貴方は責任者という立場の人間ですが研究以外のことはからっきしですからね。上への対応も、書類も、こうやって実験場まで手配しなければいけない私の身にもなってください」

女は少しムッとした表情で言う。

「違いない、いつも苦労をかけるよ」

男は苦笑する。

「それじゃあ始めようか、ムネモシュネプログラムを……」

「あの……「さっさと行け！」」

女は苦悶の表情を一瞬だけ浮かべ、無表情に戻ると足早に立ち去って行った。

「僕の可愛いエレナ、ごめんね、こんな扱いをして……ごめんね、辛い思いをさせて、だけど君がいけないだ。君は特別だったんだ。

フハハハハハハハ！」
頬に雫を垂らす、しかし、男はいつまでも笑い続け、目は狂気に満ちていた。
ーー
ーーーー
ーーーーーーーー

時刻は８時４０分、先生は珍しく遅れていた。
「オォォォアァァァルゼットォォォ！」
レイが大声をあげながら床に手をつき、両足は揃えて四つんばいの形になっている。まさか『ｏｒｚ』を体で表現し、声に出すとは、こいつには羞恥心がないのか？
「どうしたんだレイ？」
「聞いてくれリアン！　てか見てくれこれを！」
レイは立ち上がり、駆け寄ってくると一枚の紙を目の前に突き出して来た。これは……
「今日の時間割表？　これがどうかしたのか？」
別に変なことも書いてないし、ただ今日の授業が書いてあるだけだ。
「ばかか！　よく見ろ、数学、歴史、魔法講義、現社、全部頭使うやつじゃねぇか！」
授業に対してそこまで文句を言うとは……ゆとりの影響か？
「いや、こいつだけか」
「何言ってんだ？」
俺の言ったことが会話になっていなく頭を傾げている。
「何でもないよ。まぁそんな日もあるさ、普通の学校じゃ毎日こんなだぜ？」　魔法……レイジシステムが開発されてからまだ５０年、努力など無意味な、絶対的な才能によって変わる強大な力はすぐに広まり、全世界に認知され、常識となった。
しかし、全人類に義務となったレイジ適性検査を受けても、ファ

ーストすらなれるのは計算上２０００人に1人、まだ適性者が少ないのだ。しかもファーストが起こせるのはそよ風やマッチの火よりも小さいものだけ。もちろんセカンド、サードと上がるにつれて威力は格段に上がるが、確率も格段に下がっていく。そのせいで全世界合わせても３００万人程度、テトラマスターは５０人くらいしかいない。だが俺達は全員同年代のテトラマスターだ。徐々にだが高レベルのレイジ使いが増えていっている。

余談だがサードクラスになると魔法管理局に誘いの連絡が来る。断るも自由だし乗るのも自由、ただし、断ったら一生管理局にマークされることになる。大きな力がもし、暴走、犯罪などに使われた時、迅速に行動するためだ。行動も制限されず、一般人と何一つ変わらないが、そこに自由はない。

「レイもそんなことはどうでもいいから、席につけ。今は一応ホームルームなんだからな？」

携帯の時計を見ると５０分になろうとしていた。本当に先生はどうしたんだろ？

「遅れました。レイ君は席につきなさい」

ガリス先生は謝っていたが、衣服の乱れはなく、呼吸も整っている。急いで来た訳ではない……か。

「今日は転校生が来ています。」

俺達は顔を見合せる。別に転校生が来たこと事態はありふれたことだ。だけどこのクラスに入ることに少し疑問を感じる。

「入りなさい」

教室の扉が開き、転校生は先生の隣に立つ。スーツの裾を掴んで。

「……エレナ・ヴァール」

それは小さな女の子だった。足下に届きそうなくらいの黒のロングヘアー、幼い感じというか幼い容姿だ。不安なのか、涙ぐんでいる。

「幼女……だと？」

レイの社会的に終わっている発言は放っておく。

「「可愛い！」」
女子二人はしばらく帰って来なさそうなのでこちらも放置。
「ダリス先生、初等部の間違いじゃなく、高等部の、３年の、Ｓクラス何ですか？」
明らかに１０歳もいっていない女の子だ。信じられない。
「まさか！？　合法ロ……ぐはぁ！」
悪は滅ぼした。
「転校生とは言いましたが、少し違います。詳しいことは知らされてないのでわかりませんが、突然チェスタ学園長に３年Ｓクラスに預けると言われたので、そしてその間は授業を免除とのことです。」
少し困惑している感じに話している。無理もない。突然言われて、転校生じゃなく預けるだけで幼い女の子だもんなぁ。
授業免除にレイが飛び跳ねて喜んでいるのは言うまでもない。
「ですが同じクラスメイトになることに変わりはありません。みなさん仲良くするように、それじゃ、お兄ちゃんの隣の席に座ってくれるかな？」
ダリス先生はエレナに優しく声を掛け、ごく自然にレイの席に座るよう促す。
しかし、怯えているのか、ダリス先生の所から離れようとはしない。「大丈夫だよ～！」
顔を綻ばせながら手を広げるフィリア、エレナはビックリしたのか、更に隠れてしまった。逆効果だな。
「エレナちゃん、心配しないで、怖いものなんて無いから、優しいお姉ちゃんとお兄ちゃん、頭のおかしな変人がいるだけだからな」
俺はエレナに近づき、しゃがみ込んで話し掛ける。
「優しいお兄ちゃんだよ！　さぁ俺の胸に飛び……って熱い！　熱い！」
フィリアは虫を見る目をしながら無言でレイの背中を焼く。一応、無闇な魔法の使用は違反行為なのだが、正義はフィリアにあると判断したのか、ダリス先生は知らんぷりだ。

「クスッ」
あまりにも可笑しかったのか、エレナは目を細め、手を口に当てながら笑った。いや、微笑みに近いけど。
「あたしエレナ、お兄ちゃんは？」
もう怯えている姿はない。安心したのか、裾も放していた。
「あぁ、俺はリアンだ。ぼ～っとしている青い髪のお姉ちゃんがユウナ、背中を踏まれている駄目なやつがレイで、踏んでいる赤い髪のお姉ちゃんがフィリアだ」
1人1人指をさしてゆっくりと、分かりやすいように紹介する。一生懸命覚えようとしてる姿が愛くるしい。
「リアンお兄ちゃんにユウナお姉ちゃんフィリアお姉ちゃん、レイお兄ちゃん？」
「もう覚えたのか、エレナちゃんは頭いいなぁ。」
俺は少し嬉しくなり、エレナの頭を撫でる、嬉しいのか、少し気持ちよさそうに見えた。
「こんなにも早く仲良くなれるとは先生は嬉しいです。先生はチェスタ学園長に詳しい事情を聞いてきます。学園内なら歩き回る許可は得ていますので自由にして下さい。他の生徒の迷惑にならないように」
ダリス先生は教室から出ようとしたが、急に立ち止まり、こちらに振り返る。
「どうしたんですか？」

「大事な事を言い忘れていました。チェスタ学園長からの伝言です」
ダリス先生は一息つくと、急に真剣な表情なる。
「絶対に何があっても守れ」
それだけです、ダリス先生は普段通りに戻ると教室を出る。
危険なんて問題を起こす生徒くらいしかいないし……なんなんだこの念の押しようは？
「リアンお兄ちゃん、遊ぼ？」

まぁ気にしなくても大丈夫だろ。
「そういえば、なんでレイはリズに反応しなかったんだ？　あいつだって十分……成長速度が遅いだろ」
いい言葉が思いつかなかったぜ。
「なんちゃって幼女に興味はない」
その後、レイがリンチにあったのは言うまでもない。
ーー
ーーーー
ーーーーーーーー
「はい、問題ありません。仰せの通りにＳクラスに送りました。はい……そちらも万全です。」　学園長室、チェスタ学園長は誰かと電話をしていた。対応からして立場的に上の人だろう。
「はい、滞りなく、それでは失礼いたします」
チェスタ学園長は電話を切り、ため息を漏らす、よっぽど緊張していたのか額には汗が滲んでいる。
間が悪いのかいいのか、ノックを叩く音。
「どうぞ」
「失礼します」
入ってきたのはいつもとは違う、警戒心をむき出しにしているダリス先生であった。
「今は勤務中ではないのかしら？」
彼が来た理由はわかっている。エレナは何者なのか、何故高等部のＳクラスなのかを聞きに来たのだろう。だが何しに来たのかわからない振りをする。
「授業がありませんから、それに我がクラスの生徒について詳しく知る……というのも担任の務めです」
引く気はないという強い意志が全身から表れていた。
「いいわ、少しだけ教えてあげる、あの子は新たなる道なの。人類が向かう無数の選択肢のひとつ、そしてこの学園……いいえ、貴方

の3年Sクラスが選ばれた」
学園の長とは思えないほど妖艶な口調。目は何かに対して陶酔しているようだった。
「実験台というわけですか」
ダリス先生はゆらりと体を動かすと構える。
「私に勝てるとでも？　それに命に関わるわけではないわ、ただあの子に刺激を与えて欲しいだけなの」
宥めるようにチェスタ学園長は話し続ける。
「刺激、つまりは精神的ストレスを与えて欲しいの、それも特殊な条件下の中でね」

「その特殊な条件とは？」
現状を理解するために情報を整理しながらさらに聞き出す。
「サービスで教えてあげる。その条件は……」

零

エレナちゃんが来てから1週間が過ぎた。今は読書感想文という名目で魔法倫理に関するレポートを書いている。授業が完全に無くなった訳ではなく、エレナちゃんでも出来るような授業内容に変わっただけだ。

横を見るとユウナはもう書き上げたようで、普通に読書している。フィリアは苦戦中らしく必死そうだ。レイは机に突っ伏して絶望の表情を浮かべていない。

そんなレイを救う音が流れた。つまりはチャイム。

「おや、それでは終わります。明日は発表ですからきちんと準備をしてきて下さい」

やる気の無い返事をしながら帰る支度をする。

エレナちゃんも持ってきていた本をリュックに入れて帰る準備をしている。　そういえば一体どこに住んでいるんだろうか？

「エレナちゃんはどこに住んでいるの？」

「おっきな家」

そりゃそうか、住所なんて言えるわけない、普通覚えて無いよな、小さな女の子なら。

「それじゃあ帰……」

「リアン、今日は見回り当番でしょ」

少し怒った様子のフィリア……忘れてた。放課後、ローテーションで違反者がいないか見回るんだったな。

「えっと……誰とだっけ？」

「俺だよ、俺俺、俺だって」

一昔前の詐欺を真似しているレイ、前から思っていることだがこいつの相手は疲れる。

「フィリア、早速不審者を見つけたよ。ミンチがいいかな？　それともバラバラ？」

「う～ん、エレナちゃんが怖がるから血は出して欲しくないかな。絞殺で」
流石フィリアだ。周りのことを考え、尚且つ苦しませる事が出来る。俺は早速実行に移る。
「ちょっと待ておい、冗談だよな？　友達だよな？　なぁ、もういいって、首に手を当てるのは止めようぜ、ん？　フィリアも羽交い締めとかさぁ……スミマセンでしたぁ！　マジで許してください！」
不審者が騒いでいる。全く、何処までも迷惑な存在だ。学園の健全なる生徒達よ。今すぐこの社会のゴミを片付けるからね。
「皆さん落ち着いて下さい！　社会のゴミでも生まれたことが間違いな人でも私達の友達です」
「フォローになってねぇ！」　ユウナが必死に俺をレイから引き剥がし説得する。そういえばそうだった、ユウナは大切なことを思い出させてくれた。そうレイは友達……つまり。
「それは私達にとって汚点てことじゃない？」
フィリアが俺が思っていたことを口にする。ユウナは雷に打たれたような表情をして項垂れた。
「レイ、私はもう庇いきれません」
「いや、そこは汚点てとこから否定しようぜ、なぁ？　てか庇ってるつもりだったの？」
俺は、いや俺達は目を逸らす。エレナちゃんはユウナの背中に隠れた。レイの全てを否定するように。哀れだな。
「冗談はさておき、見回りに行くかレイ」
そろそろ始めなければな。時間がもったいないし。
「ウン、イコウカ。イハンシャヲマッサツスルタメニ」
……レイは今日も元気だな！　おっと、つい現実逃避をしてしまった。仕方ないがレイを戻すにはこれしかない。
「エレナちゃんも来ないか？　高等部全てを見た訳じゃないから案内ついでに見回りをしよう。安全はお兄ちゃんが保証する」
「いいの？　いく！」

やっぱり子供は元気が一番だな。そんなに喜ばれるとこっちまで嬉しくなる。さて、レイはこれでどうなったかな？　隣をそっとみる。

「早く行くぞリアン！　俺の心が悪を裁けと叫んでいるんだ！」

計画通り……レイは浮かれて先程の状態からは脱した。危なかった。

「リアン、私達も行こうか？」

フィリアとユウナがエレナちゃんを一瞬見ると心配そうな顔を此方に向ける。

「大丈夫、エレナちゃんに風神の結界は常に貼っておくし、レイにはパートシールドを付けるよう言っておく。それに違反者なんて滅多にいないだろ？　ただのんびりと案内するだけさ」

それでも納得がいってないのか、悩んでいる様子だ。

「俺とレイが信用出来ないか？」

「……わかりました。リアンを信じます」

「私もリアンを信じるわ、絶対に守ってあげてね」

全く、過保護なお姉ちゃん達だ。レイの名前がないのは気のせい。

「それじゃあ、また明日な」

「ええ、また明日」

「それじゃあね～」

さて、見回り開始といこうか。

「エレナちゃん……お、俺と手をつな」

この後レイがどうなったかは聞かないで欲しい。ただ、見回りを始めた頃には既にレイは満身創痍だったとだけ言っておく。

ーー

ーーーー

ーーーーーー

「すみません！　本棚が全部倒れていて……」

「助けてください！　花がめちゃくちゃにされて……」
「「疲れた～」」
一階の廊下をレイ達と一緒に歩きながらチェックをする。一通り回ったが、なんか今日はトラブルが多い、図書館の本棚が全て倒れてたり、花壇がめちゃくちゃにされていたり。ただエレナちゃんを案内しただけで終わる予定だったのに。大きく伸びをした後、深く息をはく。今日は魔法をかなり使ったし、辺りも警戒しなきゃいけないから疲労度が高い。
「エレナちゃんどうだった？」
「楽しかったよ！」
無邪気な笑顔を見てると疲れが吹っ飛んだように感じる。これが本当の癒しか。
「俺とリアンの得意分野だったからよかったものの、トラブルはもうごめんだ。次は校庭だな、手分けするか？」
レイがエレナちゃんから目を離さずに聞いてくる。通報したくなるのは気のせいじゃないだろう。
「いや、ここまで一緒にやったんだから最後まで一緒に行動しようか」
本棚といい花壇といい、明らかに人為的な行為だ。バラバラにならないほうがいいだろう。
「パス！　パス！」
「上がれ！」
飛び交う怒鳴り声、土煙を巻き上げながら走る男子生徒達。
「頑張ってー！」
「決めちゃえー！」
隣を見ると階段を椅子代わりにして黄色い声援を送る女子生徒。
「おお～、やってるなぁ」
この前埋め立てたばかりのグラウンドでサッカーをやっている。おそらく、いや間違いなくサッカー部だろう。
「リア充の群れってことか」

「リア充の群れってことですね」
「「嫌がらせをしよう」」
今この時、俺とレイの心はひとつになった。誰にも負ける気がしない。
「リア充って何？」
エレナちゃんが首を傾げながら聞いてくる。さて、まだ知らなくていい年頃だ。純真な心を汚す訳にはいかない。
「自分が今すごく楽しくて、この時間がずっと続けばいいなぁって思っている人のことだよ」
間違ってはいないはず、現実が充実している奴のことだし。
「じゃあエレナのことだね！　でもお姉ちゃん達がいないや……う～」
「レイ」
「リアン」
「「俺のことを殺せ」」
今この時、俺とレイの心はひとつになった。誰にも負ける気がしない。最底辺の人間という意味で。
「薄汚れた浅ましい人間でごめんなさい薄汚れた浅ましい人間でごめんなさい」
地面に体育座りになり、呪文のように謝罪を繰り返すレイの様は見ていて怖かった。
「異常もないしもう行こうか。ほらレイ、行くぞ！」
レイを引き摺りながらグラウンドを後にする。はずだったのだが、その刹那、後ろから風を切る音が聞こえた。考えてる時間はない……そう判断すると力に任せた風の壁をドーム状に大きく展開する。だがやはり力ずくだったため、風の壁はすぐに消え去る。エレナちゃんとレイの無事を確認し、辺りをみるとサッカーボールが転がっていた。
「いってぇなぁ」
頭がズキズキする。対象も選択してないし、イメージもなにもあ

ったもんじゃないからな。
負荷を掛けすぎた。
「大丈夫かリアン！」
「お兄ちゃん！？」
「なんとか大丈夫……頭が結構痛いけど」
サッカーボールが飛んで来ただけなのにこの被害、というか自爆。
とんだ笑い種だな。
「あ！　よかった～、レイ先輩実は……」
「誰だ！　このボールを蹴った奴は！？」
近づいて来たサッカー部員にレイが怒鳴り散らす。
「いいってレイ、はい、これボール、今度は気を付けてくれよ」
ボールを渡されたサッカー部員はキョトンとした表情をしている。
「ボールのことなんて知りませんよ。今グラウンドを分けてサッカー部全員で試合してますから」
なら何故サッカーボールが？　サッカー部が使っていないならこっちに飛んで来るはずはない。「すみませんレイ先輩、実はグラウンドなんですけど、また穴が出来ているんですよ、地系の魔法使える人がいないのでお願いします」
「いぃ！？　またかよ……リアン？」
俺の様子を伺うように見てくる。こんな頭痛くらい何回もあるし心配するような事じゃないと思うんだがな。
「俺なら心配するな、ただの使いすぎなだけだからな。」
頭痛は一向に治る気配を見せないが大丈夫だろう。
「だけどよぉ」
「保健室にも行ってくるから、さっさと終わらせて来い」
「エレナも保健室についてく」
そんなに酷いようにみえるのか？　今度からは気を付けないとな、余計な心配は掛けたくない。
「わぁったよ、絶対保健室行けよ」
「了解」

足元がふらつくが歩けない訳じゃない。俺はエレナちゃんと一緒に保健室に向かった。

「やっちまったなぁ……」

前に三人、後ろにも三人、合計六人か、エレナちゃんがいるし不味いなぁ。壁を背にすることにより死角を減らし、エレナちゃんをかくまう。

現在校庭からはさほど離れていない、いわゆる校舎裏にいる。近道しようって思ったのがいけなかった。そのまま前後の道を封じられて今に至るって訳だ。

「ちょっと痛い目に合ってもらうぜぃ、リアンよぅ！」

脅しのつもりか、小さな炎弾を瞬時に作り出し、頬にかするように打って来た。俺は動かず、ただそれを見るだけ。無力な人として。

「ん～？　どうした？　いつものように風で防御なり攻撃なりしてみろよ！　それとも今日は使いすぎちゃったのかなぁ？」

下品に笑う不良A、こいつがリーダーか。さっきの炎弾くらいなら風神の聖域で防げるな。

「つまり今日のトラブルはあんたらの仕業ってことね、用意周到だな。」

「御名答！　お前を痛めつけるだけでお金を貰えるんでね。だからちゃっちゃと寝ろや！」

六人は全員炎系らしく、不良A以外が火炎放射のように炎を放つ。

「裏に誰かがいること確認。聞く前に喋ってくれたから楽だったね。『風神の聖域』」

エレナちゃんには既に貼ってるから大丈夫だな。俺は火炎放射を風神の聖域で消しながら無理やり前に進む。

「お疲れ様」

魔法でもなんでもなく、顎先に掌底を当てて意識を飛ばす、横にいた二人にもそれぞれ食らわす。

「ガンズスタイル『風弾』」

火炎放射の向きを変え、こちらに放とうとしていた二人も無力化する。
「あぁレイ？　体育倉庫側の校舎裏に来てくれ。さて、話してもらおうか、不良Ａ君？」
携帯でレイを呼びながら不良Ａに近づき、腕をひね上げる。頭痛が酷くなってるな。早くしないと。
「くっ、もう魔法は使えないと思ったんだけどな、だがよぉ、やっぱ俺のほうが１枚上手よぉ！」
「『ファイアボール』」
後ろから声が聞こえ、振り返ると目の前には灼熱の炎の玉。伏兵がいたのか。
「『風神の聖域』……発動しない！？」
どうやら頭は既に限界だったらしいな。無理に魔法を発動させようとしたせいで意識が朦朧としてきた。そして俺はこのファイアボールに直撃する。死にはしないだろうけどヤバいだろうなぁ。エレナちゃんは大丈夫かな。後一分くらいでレイが来てくれるしな。俺は少し、眠ろう。
「だめぇぇぇぇ！」
エレナちゃんが拒絶の言葉を叫ぶと俺に直撃しようとしていた炎の玉が無くなる。消えたのではなく、無くなる。まるで最初からなかったように。
「リアン！」
あぁ、レイが来たならもう大丈夫だ。
俺はかろうじて残っていた意識を手放した。

ーー
ーーーー
ーーーーーー

「そう、わかったわ、エレナは『零』を使ったのね、ありがとう、

引き続き監視を続けなさい」
受話器を置く、椅子の背もたれに寄り掛かるとチェスタは高笑う。
「まさかここまで上手くいくなんてね。感情の昂りが鍵となる全てを『零』にする力。大切な人も守りたいという気持ちを刺激するだけでまさかここまで上手くいくなんて、早く報告しなきゃ……」
受話器を取り始め、どこかに掛ける。

そうして、物語は動き始める。

零2

「知らない天井だ」
「いや保健室だから知ってるだろ」
真っ先見えたのはシミが所々にある白い天井、体を起こし辺りを見渡す、辺りは白いカーテンに遮られていてまるっきり情報が得られない、先ほどの校舎裏からレイの言う通り保健室に運び込まれたのだろう。横を見るとレイが呆れた表情で丸掛け椅子に座っている。
「エレナちゃんは？　てか何時だ？」
「エレナちゃんは少し錯乱状態ってか、不安定だったからな。ダリス先生が一緒に家に帰した、時刻はもうすぐ七時だな。」
約二時間ほど寝てた訳か、頭の痛みはそのお陰かすっかり無くなっている。体の外傷は皆無だから体にも痛みはない。
「奴らは？」
さほど興味はないが一応聞いてみる。無抵抗な人（エレナちゃんのこと）に無許可で魔法の使用、しかも殺意を込めて。最低でもセカンドブレインの剥奪くらいは食らうだろう。
「リアンが倒れた後は俺が速攻でボコッて先生に引き渡したんだけどな、聞いて驚け、1週間の自宅謹慎、たったそれだけだ」
「なに？」
この学園ではかなり重い校則違反なのに1週間の自宅謹慎だけだと……それは明らかにおかしい。
「レイ、奴らは誰かに頼まれて俺を襲ったらしい、今回散々トラブルに巻き込まれて魔法を使用しまくっただろ？　あれ奴らが俺を疲弊させるためにやったらしい」
サッカーボールも奴らの仕業だろうな、まぁ読みが浅かったお陰で助かったけど。
「おっかしーとは思ってたけどよ、そういうことだったのか、てことはあの穴は俺とリアンを引き離すためか」

そうだろうな。気になるのは不良達に依頼した人物、軽い罰といい何か引っ掛かるな。調べてみるか。
「まぁ、とりあえず無事だったんだ。それでいいじゃねぇか、それよりもエレナちゃんが気になるな」
「炎に囲まれたからな、風神の聖域があったから傷は負ってないけど心にきちゃったんだと思う」
炎が四方八方からきたら誰だって怖い、俺だって後ろからファイアボールを打たれた時に覚悟したものだ。魔法が発動しなかったから、確実に当たると思ったから。
「なのに消えた……いや、無くなった？」
思い出した。あの時俺は当たると思った。なのにファイアボールは無くなった。まるで存在しなかったかのように一瞬で。
「どうしたんだリアン？」
使用者が途中で限界が来たとしても、ファイアボールは徐々に消えていく、風神の聖域が発動しなかったのは勘違いで、発動していても無くす訳じゃない、かき消す感じだ。つまり俺ではない、不良Aも除外、妨害する理由が見当たらない、レイなんか論外、その場にいなかったのだから。ならば誰だ？
「リアン！」
ふと我に返ると俺の両肩を掴んですごい形相のレイがすぐ目の前にいた。
「あぁ……ごめん、ぼぉっとしてた」
「ったく、帰ろうぜ」
ベッドから抜け出し、帰る準備に取り掛かる。といっても靴を履いてカバンを持つくらいしかないが。レイと下らない話しをしながらの帰り道。
「んじゃあな～」
「また明日」
レイと途中で別れると先ほど中断した思考に頭を切り替える、レイでもなく不良でもなく俺でもない。となると…。

「エレナちゃん……が？」　自分が導き出した答えに驚き、足を止める。どうやったのかはわからないがそれしか要因は考えられない。本人に直接聞くか？　いや、それは最終手段だろう。今は混乱しているだろうし本人が知らない可能性も十分にある。聞くなら俺達のクラスにエレナちゃんを預けた張本人。チェスタ学園長だ。リアンはそう心に決めると帰り道を走る。

ーー
ーーーー
ーーーーーー

次の日の朝、カラスの鳴き声とともに俺は目をさました。何故小鳥とかロマンチックなものじゃないんだろうとくだらない事を考えながら深く呼吸をする。朝の澄んだ冷たい空気が身体中を駆け巡り、眠気から覚醒させる。いつもの訓練を始めようとした時、俺はある問題に気付いた。

「話すべきなのか？」

レイ達の姿を頭に思い浮かべながら自分以外に誰もいない部屋で一人呟く。しかし、その問題は考えるまでもなく、すぐに答えは出た。話さないと。推測の域を脱していないこの事を話しても意味はないと結論付けた。

そう決まるとリアンは訓練を始めた。

「風」

いつもと変わりなく、パチンコ玉のような小さな緑色の渦巻いている玉が出る。

「炎」

いつもと変わりなく、赤というよりオレンジ色の陽炎のように揺らめく玉が出る。リアンはそれに満足し、己の限界を超えようと三つ目に挑戦しようとしたが、突然二つの玉が弾けて消える。不思議に思いながら、もう一度やってみる。だがまたもや同じタイミング

で玉が弾ける。
「安定しない……か」
魔法を維持するのは難しいが使用する分には問題ないと判断するとリアンは訓練を止め、朝食の準備をしようと部屋を後にする。
昨日の残り物を弁当に詰め、朝食はハムとチーズを挟んだ食パンで簡単に済ます。訓練は満足のいく内容ではなかったが、いつもと変わりない朝で、いつもと変わりない朝を過ごしていたはずなのにリアンは遅刻ギリギリだった。用事があった訳でもなく、誰かを助けていた訳でもない。何となくだ。教室に入るとエレナちゃんとレイがいなく、フィリアとユウナしかいない。
「おはよう」
「おはよ〜」
「おはようございます」
軽く挨拶をするとすぐにダリス先生が教室に入ってくる。何故か隣にはレイがいた。廊下で鉢合わせでもしたのだろう。
そのまますぐに授業が開始するが内容が頭に入らない、この後のことをリアンは考えていた。何故ならフィリアとユウナがこっちに熱い視線を送っていたからだ。美女二人に見つめられたら誰だって心臓の鼓動は早くなるだろう。
（（昨日の事話してもらうから！））
そう彼女達の目は言っていた。今なら遅刻ギリギリに行った理由がわかる。本能的に彼女達を避けていたのであろう。覚悟せねばならない。怪我は負わないよう気を付けなければ……。
いつ問いただされるかひやひやしながら時間を過ごして昼休み。フィリアとユウナが俺を囲うようにして立っている。ついに話す時が来た。正直に昨日あった事を話す。裏に誰かが存在する事やエレナちゃんに関しては喋らなかったが。
「リアン！　約束守れてないじゃない！」
鬼の形相でこちらを睨み付けるフィリア、足が震える……ただの貧乏ゆすりだと思い込もう。

「仕方ないだろう。まさかあんな計画的に襲ってくるなんて思ってもみなかったんだから。」
だらだらと冷や汗が背中に流れているのを感じながら必死に弁解をするが、それでも怒りは一向に治まらないのでレイに助けを求める。
「レイからも何か言ってくれ！」
「今は自分自身の頭に知識を蓄えているのだよリアン君、故に私は忙しいのだ」
椅子に座り、足を組んで週刊少年誌を片手に持ち、コーラを飲みながら寛いでいるレイからそんな言葉が出てくるとは夢にも思わなかった。
「週刊少年誌から何を学ぶだボケェ！」
ドロップキックの一つでも浴びせようとしたのだが、依然としてフィリア達に囲まれたままだったので動けなかった。
「友情・努力・勝利、全て人生で必要なことだと思わんかね？」
「その前に学業しろやぁぁぁぁ！」
という風に叫んでみても勿論のこと逃れられるはずもなく、昼休みが終わるまでこってりと絞られた。

時間は経ち放課後、前回襲われたことを考え、今日は全員で見回りをすることになった。警戒をしながら体育館、校舎、グラウンドと回ったが何事もなく平和な時間だけが過ぎていった。
「お疲れっした！　今日は何もなかったな」
「そう何度もあってたまるか、今日が普通なんだよ」
つまらなそうに言うレイに軽く突っ込む。
「まぁリアンが襲われたことは事実なんだし、暫くは今日のように全員で行いましょ」
「私もそれが良いと思います。備えあれば憂いなしですから」
そのまま自然にみんなで帰ろうと校門に向かう。言うなら校門に着いてからだな。

軽い談笑をしながら校門に着くとリアンはハッとした表情をすると急に足を止める。
「ん？　どうしたんだ？」
「教室に忘れ物をした！　ちょっと取って来るから先に帰っててくれ」
学園長室に行くために嘘をつく。少し心苦しく思いながらも、ボロが出る前に背を向き学校にダッシュする。レイ達はそんなリアンに声を掛けることすら出来ず、ただただ呆然としていた。
「……怪しいな」
「怪しいわね」
「怪しいです」
すぐに立ち直ったリアンを除く三人はお互いに顔を見合わせると頷き、歩き出す。

重厚だが年季を感じさせ気品を漂わせている門のような大きな木製の扉が目の前にある。そしてその上には金色プレートで学園長室と書かれていた。
「……よし」
堂々とした扉に少し躊躇いながらも決心しノックをする。
「どうぞ」「失礼します」
中に入って最初に見えたのは鮮明な赤色のカーペット、次に素人の俺でも高級だとわかる三人くらい座れそうな黒革ソファーが硝子製の机を挟んで2つ置いてある。壁際には棚があり、良く見えないが本らしきものが入っている。
奥にはそこが仕事スペースなのだろう、チェスタ学園長が机に座り書類のような物に書いていた。高級そうな机の上には俺だったら投げ出すくらいの書類の山がキレイに積み上げられている。
学園長って仕事が少ないイメージがあったが書類の山を見るとそんなことはないんだなと認識を改めた。
「今忙しいから後にーーあら、貴方はリアン君」

書類から目を離して俺の姿を見ると途中で言葉を切り、ペンを置きながら驚いたように言う。俺の名前を知っているのか。
「いえ、お忙しいのなら後日また来ます。」
エレナちゃんのことは気になる事ではあるが急ぐ必要性も感じられないし邪魔する必要もない。
「大丈夫よ、ちょうど休憩しようと思ってたの、だから少しなら大丈夫よ、そこのソファーに掛けて」
「ありがとうございます」
先ほど切った言葉はどうしたんだと疑問に思いながらもソファーに座る。
「紅茶でいいかしら？」
先ほどは棚の影で見えなかったが棚の横にポットが置かれていた。
「ありがとうございます」
「そう畏まらなくてもいいのに、もっとフレンドリーに行きましょ」
此方に微笑んだ後背中を向け紅茶の準備に取り掛かる。
「いえ、そういうわけには……生徒と学園長という立場の違いもありますし」
「残念ね、事務仕事に追われて中々顔を出せないからこういう時くらい生徒達と触れあいたいのに」
カップに紅茶を入れ、俺の前に置く。そして俺とは対面に位置するソファーに座った。
「ありがとうございます。言葉使いを変えるつもりはありません、親しむのに言葉使いは関係ないと考えているので」
硝子製のテーブルに置かれた目の前のカップを手に取り、一口飲む。まだ熱いな。
「それもそうね」
チェスタ学園長もカップを手に取りるが、猫舌なのか息を吹き掛けてから少しずつ飲んでいる。
「そういえば俺の名前知ってましたよね。面識は無いと思うのですが」

紅茶まで用意してもらっては用事を済ましてはいさよならとはいかない、紅茶が飲み終わってから帰るために世間話をしよう。ということで先ほどの会話からネタを拾う。
「貴方の大ファンだからよ」
「……大ファン？」
予想外の答えに固まってしまった。チェスタ学園長を見るとクスクス笑っている。
「分かりやすいのね。本当よ、見たのは前の魔法演技の時が初めてだったけどずっと前から貴方のことは知ってるわ。セカンドブレインを持たない『風神』さん」
「お恥ずかしい限りです」
俺の答えにまたクスクス笑うチェスタ学園長。失敗したよ。かなり俺が居づらい。もういいや。
「用事の件なのですが」
「あらもう終わり？　いいわ、それで？」
紅茶を一口のみ余裕の表情を醸し出すチェスタ学園長。
「エレナちゃんのことなんですが……今日休みですよね」
エレナちゃんという言葉に眉がピクッと動いたのを俺は見逃さなかった。
「そう親御さんから聞いてるわ」
紅茶を一口チェスタ学園長は飲む。
「それは良かった、心配してたんですよ。昨日見回り中に襲われまして、その場にエレナちゃんもいたものですから」
何かある、俺はそう確信するとチェスタ学園長の一挙一動を見る。
「心配しなくても大丈夫よ、ただの風邪だと言っていたから、心の傷も無いらしいし明日には元気に登校するはずよ」
そう言い終わるとまた紅茶を一口飲むチェスタ学園長。顔に動揺は表れない。
「良かったです。そういえばエレナちゃんはなぜ高等部の三年なのですか？　この学園には初等部もあるのに、しかも何故テトラマス

ターの中でも優秀な人材しか入れないＳクラスに？　エレナちゃんは使えないはずですよね」
「……そうね、あの子は今は使えないわね」
「今は？」
　チェスタ学園長は立ち上がると先ほどの棚に近づき、何かを取り出す。ファイル？　チェスタ学園長はそのファイルを無言で俺に渡すと紅茶を入れに行ったのだろう。ポットのほうにそのまま向かった。渡されたということは見ていいのだろう。
「エレナちゃんのレイジシステムに関する個人資料か、レイジシステム適性検査……結果風四つ？　テトラマスターなのか！　なら何故？」
　その事実に驚愕する。しかも超特化型とは。思わずチェスタ学園長の顔を見る。
「よく読んでみて」
　チェスタ学園長の催促に応え、読んでみる。
「その後のレイジシステム導入手術にて拒否反応を起こし失敗、原因は心の拒絶だと思われる」　昔はよく聞いた話しだ。体は受け入れるが外部からの異物を心が拒否する。様々な理由があったが自分自身がどうなるか解らないという未知による恐怖が主な理由だったはず。今は前例が沢山あり、聞かなくなったが。
「あの子は魔法が怖いの、両親が魔法犯罪にあって亡くなっているから」
　チェスタ学園長はいつの間にか先ほどの位置に座り、足を組みながら紅茶を飲んでいた。
「だから貴方達に預けたのよ、魔法の扱いに長けていて、正義の魔法を見させるためにね」
「正義なんてとんでもない、ただ自分が間違っていると思ったことを止めてるだけです。先ほどの親御さんは？」
　それが事実なら先ほどの会話に矛盾が生じる。
「それが良いのよ。その後孤児院に入ったんだけど幸運にも直ぐに

新しい親御さんが見つかったわ。詳しくは……ね？」
流石にそれ以上は踏み込めない。最後は……、俺はちょうどよい温度の紅茶を一気に飲む。
「分かりました。本当に話していただくだけでなく、資料まで見せてもらってありがとうございました。時間も時間ですので失礼させていただきます」
壁に掛けられた時計に目をやり立ち上がる。
「いいのよ、古い物だしね。楽しかったわ。またお話ししましょう今度は貴方のことをね」
「是非、あ！？　すみません、一つ聞き忘れてた事がありました」
扉の前で立ち止まり、後ろにいるチェスタ学園長のほうに向く。
「何かしら」
「襲われた時ファイアボールに当たりそうになりました。魔法で防御しようとしたんですけど失敗してしまいまして、その時そのファイアボールが無くなったんですよ。消えたとかじゃなくて無くなったんです。エレナちゃんがやったと思うんですけど……」
チェスタ学園長は顎に手をやり、考え込む。が、足の重心を変え、直ぐに此方を向いた。
「ファイアボールが無くなったのもエレナちゃんがやったっていうのも無いと思うわ。何も使えないあの子にそんな芸当出来るはずないもの。きっと貴方の魔法が失敗せず発動したのよ、無くなったのだって見間違いよ。」
優しく微笑んで答えるチェスタ学園長。
「そうですよね、下らない質問に答えて頂きありがとうございました」
「どういたしまして」
「それでは失礼致します。また近日中に来ると思います」
「楽しみにしてるわ」
一礼して扉を閉める。そして何故か壁に張り付くように扉の右横にレイ達がいた。

「……帰るぞ」
ギラリと睨み付ける。
「いや～、偶然なんだよ、ここを偶然通り掛かって偶然ここの壁のシミが気になって……え？」
冷や汗をダラダラに流したレイが苦し紛れの言い訳をするが俺の言葉が予想外だったようでキョトンとした顔になる。フィリアもユウナも同じような顔になる。
俺は無言で歩き出すと一息遅れてレイ達も歩き出す。
学園長室からある程度離れた廊下、もういいか。レイの脳天に拳骨を食らわす。
「フィリアもユウナも盗み聞きは駄目だろ？」
女性に暴力は振るわない。紳士だからな。
「うぅ、ごめんなさい」
「申し訳ありません」
きちんと頭を下げて謝る二人、うんうん。
「鈍い痛みが頭を駆け巡るぅぅ！　だが甘んじて受けよう！」
頭を押さえたのだが直ぐに仁王立ちをするレイ。潔いんだがなぁ。
「まぁいいだろ。許してやる、どこから聞いてた？」
「リアンが失礼しますって学園長室に入った時から」
仁王立ちで答えたレイの内腿を思い切り平手打ちする。
「鋭い痛みが！　何故に内腿！？　だが甘んじて受けよう！」
「最初からじゃねぇか、気付かない俺も俺だけどな。じゃあ説明はいらないか」
レイのことは無視して話しを進める。
「エレナちゃんに風四つのテトラマスターの才能があったなんてビックリよね」
「私はそれよりも過去が気になりました。両親が魔法のせいで亡くなったなんて……悲しすぎます」
俯きながら言うユウナの言葉にフィリアも悲しい顔になる。
「多分本当のことだろうな……だがチェスタ学園長は嘘を付いてい

「る

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8833l/

魔法使いの真実と偽りの狭間

2011年4月9日19時55分発行